



異国へ　そして私
は異邦人になった

pinokopapa

依然スーツケースの話ですが、妻のスーツケースの大きさの理由は中へ入れて持っていくものの量が問題であったわけではなく、持って帰るつもりの方が問題だったと後で判明しました。つまり、お土産であったわけです。指を折って数えています。お母さんに娘、娘婿に孫、だれだれさんとだれだれさん。これは妻の趣味の習い事に行っている人たちのことです。あの人たちにも、どこそこ行ったら何時もお土産もらってるから、今度はお返ししなければならぬんだから。その量たるや、いかばかりか。こっちは想像も付きません。人数も分かりません。妻だって、指を折るたびに増えたり減ったり。仕舞いには、まあいいか、ちょっと多めに買って置いて、余ったらうちで食べたらいいんだから。おいおい、食べるものを買ってくる気か？そうよ、それが一番安上がりでしょ。お酒やアクセサリは高いし重いし。そりゃそうだ、しかし、そんなに買ってくるのか。そうよ、いつも貰ってばかりで、あなただって、こりゃ珍しいと、何時も喜んで食べてるじゃない。そうです、その点からいえば、私も共犯でした。とにかく、これでスーツケースの件は終わり。解決しました。被害者は私と確定です。ケースを買って帰ると、早や妻は荷物を詰め込んで見えています。あれを入れ、これも入れて。そんなに要るのか。女は要るのよ。その一言で終わりです。足らなかつたら、あなたの方にも入れさせてね。はい、分かりました。私のケースの中身は、暑いところへ行くのですから、半そでシャツ数枚の下着類、薄いズボンが一着、蚊にかまれないように薄い長袖のシャツ、後は妻がそろえた洗面用具と整髪セット、着替えの下着類に靴下。主だったものはそれぐらい。小さなケースでも中身はスカスカ。はいりますよ、まだまだ。あっけないぐらいすかすか。じゃあ、雨が降るかもしれないから、傘も入れといてと傘二本。ごみを入れるビニール袋まで入ります。ティッシュにハンカチ、タオルが二本、ガイドブックに予定表。旅行先の英会話という本まで入ります。それでも余裕があります。じゃあ、帰りにお土産が入らなかつたら、入れさせてね。これがトドメでした。

ここで一つ、問題が出てきました。それは旅行会社のパンフレットの中にWiFiの宣伝が入ってたからです。無線LANルーターをかりていくかどうかです。私はモバイルフォン、つまりガラ携、妻はスマホ。ですからWiFiルーターがあれば、スマホは海外でネットにつながります。設定も私がしましたから、ルーターを借りればできます。ネットにつながればLINEができるし、メールができます。道に迷えばマップも見られ、現在位置も分かります。LINE電話もできて、国際電話が要らなくなります。ネットにつながることの、なんとメリットの多いことか。まさに世界はネット時代。レンタル料は一日千円に満たない額。となれば、これは借りていかざるを得まいというのが、私の結論

でした。もちろん。それこそネットで調べると、空港とかホテルではWiFi電波が飛んでいるとは分かってましたが、何も知らない海外へ行くのですから、そこは石橋を叩いて渡ろうと思ったわけです。しかしベトナムは3Gですから、使い物になるかは疑問でした。総と分かっている、やはり石橋を叩きました。四日間のレンタル料と保険料で約五〇〇〇円強、クレジットカード決済で予約しました。これがのちにベトナム旅行の最後の騒ぎを引き起こします。それはさておき、結論から言えば、ベトナムでホテルに泊まる限り、ルーターは不要です。ちょっとゆっくりですが、ネットは使えます。帰国してルーターの返却窓口に立ち寄った時、ベトナムへ行くのでルーターをと、女の子が横で申し込んでおりました。私はつい、ルーターは要りませんよと口走りかけました。しかし、それを言えば営業妨害になりますから、ぐっと抑えました。情報化後進国ベトナムだからこそ、電話線は貧弱でもWiFiの電波塔は立てやすいのです。そして、空港にもホテルの近くにも、スマホとWiFiの取扱店は外貨両替店と同じぐらい、いくらもありました。

さて、WiFiルーターの申し込みもしましたし、後は出発日を待って出かけるのみとなったのですが、実はこの旅に連れがおりました。妻の兄夫婦です。彼らは海外旅行に何度も行っており、空港のチェックインの経験も何度もしているわけですから、私たち夫婦は後を付いていけば万事滞りなく済ませられるというものです。ですから、あてにしました。慣れてる人に付いてゆけば問題なく行けるはずでした。それはさておき、出発するのは関空です。出発時間は十時三十分、ベトナム航空の直行便です。しかし、それに乗るには二時間前の八時三十分から始まるチェックインを済ませねばなりません。そうすると当然、八時三十分には関空の四階第一ゲートにたどり着いていなければならないこととなります。ここが国内旅行と違うところです。毎日普通に日本から、何万人もの人が海外へ旅立ち、普通に国境を越えていきます。日本から旅立つときは、チェックインでも日本語が通じて、たぶん何とかできると思いました。じゃあ、ベトナムではどうなんだろう？何か聞かれて、それに答えるのは、やっぱり英語か？と思ひ込みました。この年で、やっつけ仕事の一夜づけで、海外旅行の英会話という本を覚えることに専心いたしました。

What's the purpose of your visit?

How long are you going to stay?

Where are you staying in ?

ここまでは普通に想像できます。

Do you have a return ticket ?

と言われることもあるようです。ですから、今度は旅行会社からきているEチケットシート
の点検です。こんなものでチケットが手にできるのか？シートは一枚しかないが、
帰りのチケットをもらうにはどうすればいいのか？とにかく無くしちゃ大ごとと、チケ
ットシートを睨んではジッパーバックに入れなおすばかりです。とにかくパスポートと
Eチケットシート、この二つが命綱と思いました。そして、英語での質問への答えを口
の中で繰り返します。

Sightseeing

もしくは

For sightseeing

そして

For 4days

Yes.Here it is

簡単なもんです。と思うことにしました。I am on a group tour.

も覚えました。

英語？とんでもない見当はずれの取り越し苦労と後でわかるのですが、出発前はてん
として疑わず、一生懸命でした。しかしなあ、あの兄夫婦がこんな用意をしてたとは思
えないのだがと、思い返してはありました。入出国審査に、ビザなし渡航には英語は要
りませんよ。入国審査で私は一言も英語を聞きもしませんでした。出国審査では、そん
なこと知りませんでしたから、take off your shoes,hat.とだけ聞きました。いや、
shoes,hatとだけ聞いたのでした。この顛末はまた後程お話しします。

しかし、空港のそとに出てくると英語は要ります。勉強しておいて下さい。そうしないと水一杯、お茶一杯飲めません。何か飲み物は要りますかと機内サービスで聞かれます。CAさんが回って来て、

Would you like something to drink?

この言い方にちょっと違和感を感じませんか。感じるとしたら、それはもう古いのです。疑問文ではanythingをつかう、というのは古い言い方になってしまったみたいです。実際のCAさんはsomething drink?としか言いません。そこで、Do you have green tea?と試してみました。Noだけの答えでした。

OK,this one please.

が私に行った答えでした。私の指はコーラのペットボトルを差しています。これでいいんです。こんな片言でOKです。義理の兄はもっと豪快で、ワインちょうだいと言い放ちます。このワインが通じました。ワイングラス一杯に注がれたワインをせしめたのです。私はうなだれるだけです。

ちょっと先走りました。まだ関空にも到着しておりません。田舎から出発地の関空へ行くには鉄道もあるでしょうが、YAHOO路線を検索しても、前の日午後十時ごろに電車に乗り、真夜中どこかの駅で四時間待って新幹線に乗り換え、そこから何か大阪の路線に朝早く乗り換え、また乗り換えしてやっとたどり着くという行程をたどらなければなりません。他の様々な交通手段から最終的に探り当てたのが、ハイウェイバスでした。香川県なら、高松から関空直通バスがあります。もうこれしかないと思いました。

関空への高速リムジンバスは、朝四時三十分頃に高松駅前のバスターミナルから出発します。これだ！と当初は思いました。しかしです、四時三十分発であれば、こちらからは高速を使っても三時半には車で出ていなければなりません。ということは、二時半ごろに起きださなければならぬことになります。とたんにこの計画は挫折しました。そんな強行軍で旅行なんかしたくないと、もともと行きたくなかった虫が起こりました。妻にあたることしきりです。しかし、ゆかなければなりません。妻が起こりかえります。夫婦喧嘩の末、私はPCの前に座りました。関空付近のホテルを捜すことしばらくして、泉佐野に格安のホテルを見つけました。もう期間が迫っていたので、部屋のタイプなど選んではおられませんでした。ツインはなくてダブルベッドの部屋を確保し、やっと出かける準備は整ったのですが、それからその高速バスの切符と、車の置き場所の確認に一日かけて高松へ出かけたのでした。大混乱でした。本当は、その高松へ出かけた日に、高松ゆめタウンでスーツケースを買ったのでした。それがのちに幸いです。

切符を買い、スーツケースも気に入った納得のものを買ひ、といっても妻の気に行った大きさのものという意味ですが、準備は整いました。後は日を待つだけ。出発の日まで何度も予定表と注意を読み返し、持って行くものを点検し、体調を整え、表面は平静を装い、隠れて旅行先の英会話をぶつぶつ繰り返しておりました。

いよいよ出発の日になると、どっと気が重くなりました。しかし、たかが二十七日から三十日までの四日間です。飛行機に乗ってしまえば先ず一日住んでしまいます。翌日は市内観光で一日過ごし、スパに行って終わり、その翌日はと数えればすぐに終わってしまう旅です。何とかなると、平気な顔でおりましたが、疲れるだろうなどは思っておりました。

午後二時半に出れば十分間に合う時間です。それを、一時に車に乗り込みました。妻の運転で高速に乗ります。何を焦っているのでしょうか。日ごろにない速さで車を駆けます。たかが二十分の高速道路です。それが早かった。高速バス専用の駐車場は、もう下見してあります。ケースを買った高松ゆめタウンの前の乗り場の向かい側、道路を挟

んだ裏路地です。ここよねと妻が確かめるのに頷き、コーナーを曲がると駐車場の看板を見つけ、指さします。駐車場に入っても、車はあっても人はいません。三日間停めま
すから少し不安でしたが、駐車場の隅に、ここなら大丈夫だろうと車を停めます。そう
よね、ここなら駐車場荒らしにも会いにくいわよねと根拠のない理由で納得し、すこ
しきよろきよろしながらケース二つを下ろします。遠出する風には見られぬよう、さっ
と車を離れます。車に貴重品はおいてありません。それも確かめてきたのでした。

早速、キャスター付きが威力を発揮しました。舗装路をゴロゴロ言わせながら、私が
大きいケースを引っ張ります。私の小さな、軽いケースは妻が運びます。その距離が案
外遠かった。誰も通らないので音がうるさい。黙って押したり引っ張ったり、段差は持
ち上げて運びます。できるだけ目立たないように、忍び足で。なんでそんなに気にした
のでしょうか。わかりませんが、夜逃げのようにバス停に向かいました。しかし、バス停
では、時間が持てあますほどありました。一時間余を待ちます。そのバス停は、高松空
港へのリムジンバスも、普通の高速バスも停まります。場内アナウンスとバスの運転手
のコールを聞き逃さないように気をつけておりました。バスの来る方向を見て、高知行
きだよ、これはなんば行きとっておりました。妻はうるさそうにしています。お上り
さんみたいだからやめてと言います。その私たちの座っている席の前に、なんと妻の三
倍はありそうなスーツケースを横に置いた白髪のご婦人がおりました。そして、パイポ
を加えた中年の女性と坊主頭のカップル、ビジネススーツの男性、沢山の人が、明らか
に空港へ向かっていると思われました。お上りさんは私たちだけのようでした。

高松空港へのリムジンバスが出た後、とうとう来ちゃいました。関空行きのバスです
。来なきゃいいのにと、一瞬思ったみたいですが、私が。しんどい旅の始まりに、はやひ
るんでおりました。バスだって仕事ですから来ないはずはなく、私も妻も前席の三倍も
の大きさのスーツケースを持ったご婦人の後を付いていきます。年上妻のような人が、
相変わらずパイポを加えて、オレンジ色のスーツケースをバスの荷物室に入れてもらっ
ておりました。この人は何か、ダンス音楽のようなリズムを、足で刻んでたりしました
。なにか怪しい。大体女の人が、公衆の面前でパイポを加えてて平気ですか。それを若
造夫が俯いたまま、じっと耐えた風で咎めません。ベトナムへ行く前に、早やドラマを
見てしまった気がしました。あれって、年上だよね、と妻に言いましたが、これには無
関心。指さしたりしないの。なに絡まれるかわからないんだから。そうですよね。これ
以上詮索してもなにかわかるはずもなく、わたしたちもケースを荷物室に預け、バスに
搭乗しました。席のナンバーを確かめ、もちろん窓側は妻、私が通路側。私は肘掛けの

内側のボタンをそうっと押して背もたれをゆっくり倒します。それも、後方の人に気付かれないくらいの角度とスピードで倒していきます。わずかに傾いたところでそれをやめ、妻にも、少し倒したらと勧めました。返事は、いいの一言でした。旅が始まるという高揚感と、はや軽い疲労感からこの旅は始まりました。高速バスはこの後、二か所だったか三か所で客を拾い、後はひたすら関空へと走ります。

ベトナムへ観光とは少しマニアックとお考えかもしれませんが。大体海外旅行の第一歩といえば、昔は韓国、今台湾ではないでしょうか。私たちの前の世代なら、それは絶対ハワイであったはずです。私も当然そうだと思ってました。それがベトナムで、それもホーチミン市です。ハノイではなくです。ハノイなら観光名所は多々あります。ハロン湾、ホーチミン廟、文廟、鎮護寺、護国寺、水上人形劇。ホーチミンへ向かう前に、ひそかにネットで調べておりました。世界遺産もあります。しかし、NHK・BSの番組で二度目の旅というのがあって、ホーチミンへ行くと決まった時から番組表にホーチミンを放映するのを目ざとくチェックし、ビデオにも撮って見直しました。そして、番組で紹介されている良いところも悪いところもみんな良いところに見えて、ちょっと胸をわくわくさせ、もうほかのところは見えなくなっておりました。ホーチミンは鶏料理がおいしく、竹の先を二つに割ったものに鶏肉を挟み、日本の焼き鳥のように焼きます。それに魚醤のようなものをつけて食べるととても美味で、これが現地の人のおすすめだそうです。それからパクチー。これは癖が強く、現地の人でも半分の人が嫌いだそうです。私はこの番組から、料理を頼むとき、チョートイというのだということも覚えておきました。有難うは、カムオンで、オンは鼻にかかったように発音しなければなりません。

しかし、こんな知識を私が事前に調べていたなんて、毛ほども見せませんでした。妻に、まるで私が楽しみにしているように思われてはしゃくですから。

しかし、ことは動き出しました。よく知っている高速高松道をバスはひた走ります。他人に運転してもらって、なんて楽なんでしょう。昔は、バスに乗っていても安心して眠ったりできず、自分が運転しているようにじっと前を見て監視していました。だから、疲れた。それが今日は頭が半分眠ってぼんやりしているのです。これから旅が始まるというのに、寝てしまいそう。で、寝てました。次に気が付いたのは、大鳴門橋を渡っている時でした。外を見るとどこかの海で、渦を巻いているではありませんか。それまで意識が飛んでた証拠です。今日は大潮じゃないから、渦も小さいわねという妻の言葉に、何やら言ってごまかしました。寝てたとは言えず、ましてここがどこかわからなかったと悟られないために、曖昧に答えたわけです。そして、次はトイレタイムのパーキングエリアでした。席を立ててトイレに向かいます。手足を伸ばして眠気を覚まさないで、これからの長い旅を続けられませんか。まだ数時間バスは走ります。明石か

ら神戸を抜けて湾岸線を走り、USJを見下ろして海の中の誘導路を見て、そして関空。
三時間半のバスの旅でした。関空の第一ターミナル前のリムジンバス乗り場につきました。
ここからが大変。関空内に入り、迷路を降りて南海電車乗り場へ向かわなければ
なりません。

終点の関空第一ターミナルから南海電車の乗り場へ向かうといっても、関空自体初めてですから、どこをどう行けばよいのか分かりません。当然のことです。しかし、妻は私がなんのためらいもなくスッと正しいルートを行かなければ満足しません。間違えればえらいことです。女って、どうしてこうなのでしょう。さっと目を配り、案内表示をさがします。でも、何にもないんです。バスを降りた人は、まるで通いなれた道に行くように扉の向こうに消えていきます。私たちも、バスの荷物室からスーツケースを受け取ると、たぶんそれでいいんだろうと入り口を通り、中へ向かいます。すると、ガラスで囲われた中に長いエスカレーターが下りていました。四階を通り越して二階に下りるエスカレーターでした。見上げると太い円筒の骨格で鉄骨をつないだ構造の威容が剥き出しに見えます。そうであっても、そんなことにかまって、すごいなあとは言えません。妻はそんなことに関心はないからです。南海電車の乗り場へ向かうのですが、迷います。さらに狭いフロアを巡り、下へ行くと、ありました。その構内にwifiルーターを予約したショップもあるはず。私は妻の大きいほうのケースを引っ張り、妻は私の小さいケースを持って切符売場へ行き、路線図を見ます。どこ見たらええんか、わからん？あそこが現在地だから、二駅先の泉佐野で、お金は**円。高いなあ。妻が自動販売機で二枚切符を買います。その間に私はwifiルーターのショップらしいものを目でさがします。改札口をくぐったすぐ横にそれらしき店がありました。あれだ、明日の朝、あそこでルーターを借りるんだ。早よ行こ。足弱わ二人がゴロゴロとケースを引っ張り、改札口を通ります。ルーター・ショップには誰も並んでいませんでした。翌日は朝早いのに、私はここで並びました。それも、そちら様のレンタル分は二階で用意しておりますので、そちらでお受け取りくださいという口上を聞くため、並んだのです。

関空から泉佐野へ向かう南海電車は、私たちのような明らかな旅行客もいましたが、むしろ普通のお勤め帰りといった風の人たちが大半でちょっと意外な感じがしました。手に通勤カバンを持ち、少しくたびれたネクタイをしたいかにも会社員といった人、学生といった風情の女の子、自動車整備工といってもその通りと思える若い人などが車内を一杯にしています。ええっと、泉佐野は次の次だから、すぐ降りるよと小声で言ってる私たちは、服装からして旅行客そのままのおのぼりさんでした。そんな私たちを別段じろじろ見るでもなく、周りは自分のことに閉じこもっています。若い人は、誰もそうするようにスマホを取り出し、いじくっています。女の子は暗くなった窓の外を見ている。都会の孤独はどこでもかわりません。だれも繋がっていたいとスマホを握り、都会の孤独そのまま電車の中に佇んでいます。

それはもういいことです。二駅目で降りることだけ、私たちも気を配っておりました。降りた時の場所を知っておかないと、駅の西側に向かわなければならないのに、反対側に降りると途端に道に迷います。外はもう闇が迫っておりました。暗くなると余計に迷います。電車が停まるとすぐにケースを押しておりました。ところがたった二駅目の駅なのに、はや降りる人が何人もいるのです。ちょっと、想像がつかない。閑空で働いている人が帰宅のために電車に乗り、ここで降りる？飛行機で返ってきた人が、ここで降りる、閑空までバスでやってきた人がここで降りる。これは私たちです。まあ、暇ですから、そんなことに思いを巡らせておりました。しかし、そんなことは頭から振り払って、とにかく下車して、予約したホテルに向かわなければなりません。落ち着くのはそれからです。多くの人が下へ下りていきます。それについて行けば外へ出られるはず。エスカレーターを降り、改札口を通ります。ついでに、ホテルはどっちでしょうと訊いてみます。ああ、それなら、こっちへ行って信号を左に曲がるとすぐそこです、が駅員さんの返事でした。予約したホテルは、駅から近いから予約したのでした。だから、すぐそこのはず。ところが、外に出ると、もう暗くなって、店も全部閉まっています。夕食どころじゃない。が、それは後で考えましょう。そうきめて、妻とケースを押してゴロゴロと道を行きます。信号まで来ると、言われた通り、ホテルは左手に見えました。何階立てでしょう。低いホテルでした。もう到着です。入り口を入れば、狭いフロントで、中年の受付の人がにこやかに迎えてくれます。名前を書き、鍵を受け取り、エレベーターで登ります。降りれば煙草臭い廊下でした。ベトナムへの道程はまだ遠い。狭い部屋で、やはり煙草臭さに耐えながら、荷物を置いてまた外に行きます。食事です。どうしよお。コンビニだ！なんて貧乏くさい。もうそれしか手は残っていませんでした。コンビニ弁当、パン、ジュース。コンビニへ向かう途中も店は開いておらず、何を買うかとそれしか思っておりませんでした。みじめなもんです。せめてあったかいものを食べたかった。お弁当をチンしてもらったらいいのよ。はい、そうですね。だったら、徹底的にきびったのり弁にする。そうよね、私も疲れたから、食欲ないし、それでいいわ。私の不満は、かくも軽くかわされてしまったのでした。

ため息交じりで食べたコンビニ弁当とジュース、妻は食欲ないと菓子パンをかじり、貧しくも貧相な夕食を終えて後は寝るだけ。明日の朝の五時には起きて、六時、七時と頭の中で考えながら目をつぶると、もう寝てしまっておりました。そして、本当に五時に起き、カーテンを開けてみたのですが、当然未だ夜は明けておらず、頭は眠気でまだぼんやりしておりました。妻もそのあとすぐに目を覚まし、用意を始めます。まずパスポート、Eチケットシートの確認、いくら両替していく？まあ3万円ぐらいかなあ。それが今日最初の会話でした。そんな話はもう何度もしていたのに、確認のように訊いてきます。物価のことを考え、またベトナムにはバッチモノしか売ってないはずですから、大して買い物はできないと思ってました。食べるものも日本の方がおいしいから買わないほうがいいと、息子が言うておりましたし、それからすると買って帰るお土産物なんてないんじゃないかと想像できたのでした。そうです、私たちのベトナム行きの第一目的は、ホーチミンにいる息子に会いに行くことでした。そうじゃなかったら、私は行かない。それにもかかわらず、妻の買う気は旺盛でした。あの大きなケースは、今だって隙間だらけなのに、帰りは一杯にする気満々でありました。でも3万もあれば一杯になるぞ、というのが私の意見です。どうなることやら。この意見は、妻への牽制でありました。

そうしているうちに夜が明けます。冷たいコンビニおにぎりや冷たいジュースをうながされるままにかじり、食べたものがどこに入ったのか分からぬまま衣服を着替え、靴下を履き、用意します。ケースを押して部屋を出たのが七時でした。余裕です。しかし、それからが大騒動でした。

余裕をもって関空駅に着いた私たちですが、気持ちに余裕などありません。手にそれぞれスーツケースを持ち、人波に押されながらホームを歩きます。そっちに向かって歩いていいのかわかどうかも分からず、付いていくばかりです。このホームが長い。人の流れに乗って歩くのも、ケースのおかげで一苦勞です。しかし行かねばなりません。ゴロゴロ、とぼとぼ、ゴロゴロはケースを引っ張る音、とぼとぼは早くも疲れた私たちの足取りです。人の流れを邪魔しながら、改札口へ向かいます。さりながら、改札口を出る前に、昨日確かめておいたWiFiルーターを受け取るショップに行かなければなりません。これは意気揚々としておりました。確かめておいたのですから。しかし、店の前には早くも五人以上十人未満の人が並んでいます。並んだ途端、私の手にはショップからのメールを印刷した紙が用意されていました。わずらわしい確認作業で時間を食いたくなかったからです。前に並んだ人は順調に流れて行く場合もあれば、なにやら確認に手

間取ったりと、やきもきさせます。でも、そうこうするうちに私の番になりました。メールを渡し、そうすればさっとルーターが出てくるものと思ってました。なんと、これが、一番手間取った。受付嬢はメールを見、奥に入ってまた出て来、箱の中のバッグをパタパタ探してもう一度奥に入ります。そして、慌てて受話器を握り、なにやら話してすぐ、申し訳ありません、お客様のルーターは二階でおわたしすることになっているようです、お二階に向かっていただけますでしょうか。えっ、店はここだけではないのか、それって、どこ？探すの？どこ？口では言いませんが、このだだっ広い迷路のような閑空内をまたもさまよわなければならないのか、と混乱の極みになりました。しかし、平気な顔を装って、本当はチツと舌打ちしながら私たちは窓口を急ぎ離れ、南海電車の改札口へ向かいました。妻は付いてこれていると確信しながら、思わず早足になっております。私たちの手には、大きいケースと小さいケース。邪魔だと思ふ暇もなく、まだキャスターが付いていてよかったです。昨日降りてきた階に上がり、さあ、二階だけどどっちへも行けない。こっちじゃない？の声もあればこそ。ホールをぐるぐる回って、そうだ、四階にもショップはあった、行くよ、そう言って三階を飛び越す長いエスカレーターに乗って四階へ行きます。四階は外への扉を通り、ガラスの通路を歩き、また扉を通して、立ち止まって見れば同じルーターのショップがあるじゃありませんか。しかも窓口には人は並んでいません。あの一、これですがとメールを見せ、二階で受け取れといわれたのだけど、と困り切った顔であったとおもいます、そういうと、お客様、こちらを行って次のエスカレーターに乗って、下に下りていただきますと、降りたところの左手に私どものショップがございます、そちらへ言っていただけますか。もうモノも言わず、そちらに向かいます。妻が礼を言っていたようでした。

しかしこんな時でもスーツケースは持っていかなければなりません。なんとも荷物じゃ。そう思いながら引っ張って、エスカレーターのステップに乗せ、下へ下へと下りてゆきます。長いエスカレーター、とため息が出ます。さっきも登ってきたのに、また降りるのです。で、降りました。するとそこに、やっと見つけました。下で指定された二階のショップ。あの、と問いかけると、その向こうに、下でここへ行くように言ったショップの受付嬢が嬉しそうに笑って、待っていてくれました。この人もほっとしたのでしょう。私も胸をなで下ろしました。妻と一緒に説明を受けます。そしてルーターの入ったバッグを受け取り、私のスカスカのケースの仕舞い、また四階へ。余裕をもってやってきた時間を、全部使い切ってしまいました。

それでも義兄夫婦はまだ閑空に到着していないだろうと高をくくって四階に行ったのですが、エスカレーターを降りて四階のフロアーを先に行くと、チェックインのカウ

ンターの前に義兄夫婦が手ぶらで待っているではありませんか。遅かったでえ、がこの人の第一声でした。負けた！と敗北感に打ちひしがれました。この人たちは朝暗いうちからケースを引っ張って、徳島駅前まで二十分以上歩き、高速バスに乗って四時間半掛けてやってきたはずです。そんなしんどい思いはいやだと、私たちは前の日からこっちに来てたはずなのに、負けちゃいました。

あの人たちは海外旅行に何度も行っており、関空もよく知っているはずですが。ベトナム航空は16,17番だから、そこに並んで手続きしたらいい、と義兄が教えてくれました。チェックインカウンターは今いる場所から回り込む、少し離れたところでした。今義兄たちといるところも人がざわつき、右往左往しています。私たちは急いでカウンターに向かいました。ところがカウンターらしき場所が解りません。海外デパートの案内所とか、何かのブランド品の案内所があるコーナーでチェックインカウンターはどこかと、焦って尋ねてみました。ん？といった反応しか返ってきません。褐色の肌の、インド系の若い人でした。ですから、日本語が十分解らないらしく、なにやら英語らしき単語が聞き取れます。こうなったらこっちも英語しかありません。ベトナムエアーラインのチェックインカウンターはどこかと中学英語で口走ってみました。すると、コーナーから出てきて、探してくれている風でした。そこへ義兄夫婦がやってきて、こっちだ、ここに並んでチェックインするんだと教えてくれました。まだ捜してくれているインド系の若い人に、サンキューと礼をいい、振り向いた彼を後にして大急ぎで義兄の指さす方向に向かいました。実はその指先に見えた人波に、ギャッと叫びそうになっておりました。なんという人混みでしょう。たくさんの航空会社のチェックインカウンターに向かうセパレートテープで区切られた列に、一杯の人が並んでいるのでした。その人たちのほとんどがアジア系で、白人の人たちは数人しか見かけませんでした。そして、けたたましい物言いでしゃべっている人たちは、並のキャスターじゃない大きさの台車に何個も段ボールを括りつけて押しています。まだ爆買いはあるようです。私たちは黙って、そっと並んでました。

日本語も片言しか分からなかったショップの若者はひょっとするとスリランカの人かもしれないと、そんなことを思いながら、私たちは長い長い列にならんでおりました。早朝というのに、なんでこんなにひとがいるのでしょうか。そしてとりわけ、大きな台車を押す人たちのけたたましい話し声に、私たちは圧倒されておりました。そんな大荷物の人が、びっくりするほど沢山いるのです。彼らはたぶん当然のことでしょうが、帰る人たちなのでしょう。日本で沢山のものを買って、それを持って帰る。そんな人が、私たちが向かうベトナムだけでなく、韓国、中国、台湾、フィリピンなどへ向かう便の列に並んでいます。特に、やっぱり中国。爆買いは中国政府が禁じているはずなのですが、たぶん中国人は政府の言うことなど聞かないそうですから。

列の進み具合は割と順調で、あまり一か所に立ち止まっていることはありませんで

した。そうしてちょこちょここと進みながら横を見ると、おおっ、白人のなんと大きなこと。私たちはこのベトナム行きの後、十日ほどで高野山に出かけました。これも私には苦痛そのものの旅行で、あとでこうだと聞かされ、びっくりしたことです。そして、私はこの高野山で、閑空の列よりも大勢の白人を見かけることになりました。そのうえ、高野山の宿坊の風呂では、白人の若者と片言で話までしましたり、朝の勤行で、暗闇の中、たまたま隣に座った白人の女性と一緒に、これも片言の英語で打ち合わせをし、お焼香をすることになったのでした。しかしその女の子の大きいこと。肩幅なんか、私の倍ほどもありそう。そしてその連れの男性はプロレスラーか。その体格はもう脅威ですよ。

しかし、そうこうしているうちに、とうとう私たちの番になりました。夫婦ですから一緒に窓口へ向かったのですが、先に向かった私の後で妻は待つようにという合図がありました。一人ずつの受付しかしてくれないのです。私は緊張し、Eチケットシートとパスポートを出しました。すると男性の係がもうケースの方を中へ取り込んでいます。チケットの方は女性の受付嬢がピピッとパソコンを操り、さっとチケットを取り出し、カウンターに置きます。次いで荷物の預かり証を男性がカウンターに置き、それぞれに定型のせつめいがあるってチェックインは終わり。私は窓口から離れ、妻の背側で待っていました。これも同じことです。私たちはこのあっけなさに、かえってほっとし、窓口を離れました。後は円をドンに両替するばかりです。

ベトナムの通貨はドンといいます。その為替率は一円=0.0058ドンくらいです。なんとこまかな数字でしょう。逆にドンの紙幣を見ると、面食らうほど0の数が多いのです。10000ドンがやく50円。要するにドンを200で割るとほぼ日本円に換算出来ることになります。しかし、これには戸惑いました。0の数を数え続けでした。慣れてないせいもありますが、札には皆ホーチミン氏の肖像画が刷られており、色が若干違っているといたった具合で、すぐには見分けがつかえません。ですから何時も札の0の数を数える羽目になります。そしてその数字を200で割って円に直し、ああこれぐらいかと思当をつける作業を、買い物たびにすることになります。ところがベトナムの物価は安い。私たちには、ホテルの人たちにチップをあげるという経験がない。ですから、あげるタイミングが分からないし、額も見当がつかない。沢山のチップはあげないでくださいと、ホーチミンでのガイドさんに言われました。沢山あげると、チップの額を吊り上げることになるというのがその理由でした。それ相応の額とは、荷物を運んでくれるボーイさんには50円から100円が相場です。へっ？ということは、 50×200 で、10000ドン、100円は20000ドンと、急いで計算しました。ところが、両替したドンの札はどれがどれか判別がつかえません。それやこれやで始まるベトナムの旅ですが、いまこの時点では

まだ飛行機にも乗っておりません話を戻しましょう。あっけなくチェックインは終わったのです。急ぎ、義兄夫婦を捜し、両替を済ませておかなければなりません。いままでの急ぎ足を今度は引きずりながら、もとの場所に引き返したのです。

義兄たちは、いかにも慣れた様子で椅子に腰かけて待っておりました。どしたんえ、遅かったでえ。実は関空の中で借りるものがあるって、それを受け取るのにあっち行ったりこっち行ったりで、それに時間かかってたいへんだったんよ。そういう妻の言葉を半分聞いて、半分横を向いてよそを見ているのが義兄でした。こんなふうですから、ワインちょうだいと言い放ち、機内サービスでワインをせしめることが出来るのです。私と違い、前もって準備したり、考えすぎてドタバタ失敗したりのない人です。

さて、一息つけました。両替しましょう。旅行会社のパンフレットの中に、手数料5%引きの案内がありました。まずその銀行をさがします。ところが、両替所はあちこちに沢山あり、迷いました。それを妻が見つめました。そこへ行くというと、義兄夫婦も付いてきました。5%オフはおおきいでえ。その一言です。おまえ、なんぼするん？義兄が妻に訊いています。3万円。それではお土産も買えんだろ。物価がやすいからって、あれが言うのよ。そういつて妻が私を指さします。ふーん。そして、私たちは予定通り、3万円。義兄たちがいくら替えたかは知りませんが、もっとたくさん、それも思わぬほど沢山替えたようでした。かの人の買ったキーホルダーの総額が日本円で三万円。兄嫁の買ったシルクのスカーフが千二百円。妻が買ったスカーフが五百円、私は娘婿に千円の皮バンド。そのあと、義兄たちの買い物は、この店はバッチモンは売っていません。というのは建前で、このチケットを見せれば、10%オフになります。それがホーチミンでのガイドさんの言い方で、それを信用して仕舞い、義兄たちは買って買って、試食もしてまた買って、私のこれも美味しいという言葉でまた買ったのでした。店の外へ出た時、義兄たちは夫婦が両手に袋を下げておりました。

両替を済ますと、ほどなく出国審査に向かわなければなりません。私たちは彼らに付いていくだけです。もう沢山の人がぞろぞろと細い通路を行っておりました。途中、通路の外から頭の薄い年取った係りの人が、液体のものは持ち込みできませんと叫んでおりました。前のほうの若い女性がペットボトルをゴミ箱に捨てておりました。私も水のペットボトルを持っておりましたので、妻とともにそれを空けて捨てました。

出国審査は、肩から掛けたバッグを籠に入れ、自分はゲートをくぐるだけの簡単なものでした。これを済ませると、そこから先は関空内でも日本じゃありません。もう簡単にはここから出られないのです。買い物も免税店です。出発まではまだまだ時間があります。ぶらぶらそんな店を覗くしかありません。しかし出かける前に買い物をするわけ

もなく、覗くだけで終わりです。でも、この酒、安いなあ、買っていくか？もう！兄嫁が怒っています。液体はダメっていったたでしょ！ニヤッと笑うだけです。

程なく案内板にベトナム行きの掲示が出て、私たちは出発ゲートに向かいました。すると、ここでも早や長い行列ができておりました。ところが、行列の向こうにもう一つの入り口があり、こちらはがらがらで誰も並んでおりません。こっちすいとるやん、こっちいこうで、と義兄が歩いていきます。すると、そこに待っていた二人のCAさんらしき人が突然、こちらはビジネスクラスのお客様の入り口でございます、と言い出したではありませんか。おとおさん、そっちは違うわよ、と兄嫁が引き止めます。えっ、私ら、ええ方とちがうん。ちがうわよ、エコノミーのほうよ、とはばかりのように小さな声で呼び返しました。まるで、絵に描いたようなコント的一幕です。

とにかく長い列を並び、チケットとパスポートを見せ、すこし歩くとウイングシャトルが待っていて、これに乗るとレールの上を走るような不快感はなく、静かに登場ゲートへ向かいます。この車内には座るベンチはなく、中に手すりと棒が二本たっているだけで、立ちっぱなしでした。

それを降りてトンネルのような通路を通り、タラップを登ることなく機内に入って行きました。なかでアオザイのCAさんがまっていた。そして、チケットを見て、あっちと指差します。なんか言ったとは思いますが、わかりません。ああ、あっちね、と義兄がどんどん行きます。後について私たちもいきます。私たちの席は主翼のすぐ後方にありました。妻と兄嫁が窓側の席に並びます。私は通路の側、義兄も通路を挟んで向こうに座りました。まだ次々と乗り込んできます。別に着飾った人たちではありません。ごくごく普通の人たちでした。スーツさえ着た人はいません。みなアジア系の人たちばかり。聞こえる言葉は英語でもなく日本語でもなく、たぶんベトナム語に中国語といったところでしょうか。旅が始まります。飛行機です。だからいやだったんです。飛行機は嫌い。だから海外旅行なんていきたくなかった。今の時代に、飛行機が怖いなんて、子供みたいなこと言わんのと妻にいわれるのは目に見えています。後5時間半。5時間半待てば降りられる。それまで落ちませんように。じっと手を握り締め、そう思っていました。子供は3ヶ月に一回、こうして往復してるんだから、父も耐えねばなりません。

だいたい金属のかたまりが宙に浮くって、信用できます？どこにも機体を支えるもの

が見えないじゃありませんか。電車ならレールが支えておりますし、船なら水が支えています。それはね、ヘリウムノの入った風船が宙に浮くでしょ。空気だから見えただけで、ちゃあんと支えるものはあるの。物理を専攻した娘がそうお説教をします。いいんだよ、風船なら風船が浮いてるのはそれでいいんだ、お父さんは自分が宙に浮きたくないの。正直な私の感想です。でも、もうすぐ私は宙に浮きます。そもそも、プロペラも回ってないのに、なんで飛行機が動き出すんだ。ジェットエンジンが後ろにガスを噴射しているかは知れないが、ガスなんて吹きだしたら何トンもの機体が動くなら、お父さんが口を尖らせて息を吹きだしたら、お父さんの体が反対向きに飛ぶのか。みろ、飛ばないじゃないか。お母さん、お父さんが子供みたいなこと言ってるよ、と娘にまで言われてしまいました。

それはいいんです。ドアが閉められ、安全ベルトを着用するよという指示が出され、機体が巡ってエンジン音が最高潮にまで高められます。しかし、精一杯、限界まで力を振り絞るといった感じはありません。ひょいっと動き始め、するするっと動きを速めていきなり速度を上げ、ふっと宙に浮くではありませんか。もう引き返せません。行くしかない。5時間後にはホーチミン空港です。

飛行機が飛び立つと、5時間半でホーチミン空港です。それぐらいの時間は寝てりや
すぐ経ってしまうから寝てりやいいんだと高をくくっておりました。前の日、ダブルベ
ッドなんて寝たこともないもので寝たので、寝られませんでしたから、体の芯は疲れ切
っていたのです。ところが目をつぶっても寝るどころじゃありません。機内の騒音は気
になりません。人声もひとしきり騒がしかっただけで、すぐ納まりました。納まってな
いのは、私の神経。頑張ってみたのですが、あきらめました。もし落ちても、かみさん
がそばにいるし、それだけでいいじゃないかと、自分に言い聞かせてました。すると、
通路を挟んで義兄が話しかけてきます。前の座席についているディスプレイを指して、
映画が見られるといいます。CAさんたちもそのうち、イヤホンをもってまわって、貸
してくれました。そのあと、CAさんたちが持ってきたのが、豆菓子のおつまみでした
。そして飲み物を配って回ります。その時でした、義兄がワインちょうだいグラス一
杯のワインをせしめたのは。私や妻、義理の姉が、不本意ながらコーラだのジンジャ
ーエールで我慢したのにもかかわらずです。そのあとの、機内食も当然、何にしますか
、と英語で聞かれ、洋食、と一言できめたのですから、わたしがWestern、pleaseなん
ていうのが、恥ずかしいくらいです。私の取り越し苦労はなんだったんでしょうか。

They are the same

things、please. と妻や義理の姉の方も伝えている私が馬鹿に見えました。そっちは何
にしたんえ？と義兄が訊きます。洋食。一緒や。でも、メニューにメインは和食とあり
ます。よくわかりませんが、メインが何か圧力なべで調理した牛肉の炊き込みご飯のよ
うなものですから、それを和食とメニューにかいてあったのだと思います。そして、そ
のあと、デザートも出てきたのですが、とにかくテーブルが狭い。その狭いテーブルの
上でプラスチックのフォークとナイフで食べなければいけません。これには技術がいり
ます。まるでお茶席でお茶をいただくような緊張感でした。とにかくこぼさないよう
に、散らかさないようにお腹に納めます。すると、飲み物と何やら一切れのクレープのよ
うなものが出てきました。要するにこれがデザートでした。日本人は汚く食べ散らかし
たり、食器を散乱させてはいけないと、実に気張りました。今回はセーフでした。
上出来です。しかし、あとで食器とトレイを回収にくと、そんなことはお構いなしで
、一つ一つ全部そのままワゴンに納めて終わりです。がっかりですが、私は何を期待し
ていたのでしょうか。こっちのほうが自意識過剰でした。

前の座席のディスプレイはタッチパネルになっており、指でつつくとメニューから
映画を見る、ゲームをする、ベトナムの観光情報を見るなどの動画を見ることができ

ようになっておりました。義兄が、ここをつつくと日本語で見られると教えてくれました。要するに、タブレットのようなものがくっついているというわけです。前の座席のディスプレイはタッチパネルになっており、指でつつくとメニューから映画を見る、ゲームをする、ベトナムの観光情報を見るなどの動画を見ることができるようになっておりました。義兄が、ここをつつくと日本語で見られると教えてくれました。要するに、タブレットのようなものがくっついているというわけです。しかし、体の芯が疲れ切っている私は、映画も観光案内もどっちでもよくて見る気もしませんでした。でも、せっかく言ってくれているので、なんだったか、映画の一つを選んで見ました。耳に簡易型のヘッドホンをつけ、小さな画面を見るのですが、ほんの少しで飽きてしまいます。横を見ると、義兄もはやヘッドホンを外し、ぼんやり横を見てます。私も映画をやめ、ゲームを選んでみました。同じものを3つ並べると消えるというおなじみのゲームでした。しかし、これも反応が遅く、すぐやめてしまいました。しかし、眠れぬ身に、機内は退屈そのものでした。すると、向こうの座席のディスプレイに飛行機が飛んでいる画像が映っているではありませんか。さらに、機内中央の壁にかかったテレビにも、同じ画面が映っていて、それが刻々と変わっていきます。おお、これは今この機が飛んでいるところを映しているんだと気づきました。前の席のディスプレイに映っているのだから、目の前のにだって映るはずと、指で突いてつついて捜査してみます。そのうち、やっと映って、いま九州の南端を飛んでる、台湾の手前を飛んでるんだとみておりますと、横で妻と兄嫁が嬉しそうに窓の外を見て、ほれ、あれがここよ、とディスプレイを指さしながら言うておられます。私が苦労してこの画面が映るようにしたのに、彼女らは悠々とそれをやってのけてました。台湾行ったときは、新幹線に乗ったとか、あそこが台湾の端っこよとか、言うておられます。画面を見てると、現在位置と地図、現在位置での時刻、関空の時刻、ホーチミンの時刻も表示されておりました。機が飛んでいるスピードも刻々変化しながら表示されます。私は一瞬、すべてを忘れて、そのあとずうっとこの画面を見続けておりました。

旅の、それも初めてのジェット機の旅ですから、ずうっと緊張感が抜けませんでした。それが、当のジェット機の航跡の映像を見ていて飽きないのですから皮肉です。しかし、これは帰りの便で気が付いたことなのですが、やはり地球は自転していました。なぜそれがわかったかという、この機がホーチミンへ向かっているときの時速が、関空へ帰るときの時速より1.3倍ぐらい早いのです。ジェット機の速度は、地上の地点をどれぐらいの距離飛んだかで測っているようで、地上は東へ回転し、機は西へ飛んでいますから、両方が合わさって相対的に機は速くなるということではないかと推測しました。それにしても、ジェット機は速い。

台湾を過ぎると、ホーチミンは後2時間ほどで到着します。妻と義理の姉は、機の窓から外を見て、あれって台湾よね、と言って騒いでおりました。台風21号の過ぎ去った後の空は、少しの雲とあとは青空。南シナ海を南下し、ホーチミンの横を下がって機首を返して北へ向かい、空港を目指します。高度を下げ始めると、眼下に湿地帯が広がり、さらに行くと広いゴルフ場が見えてきます。その中を川が流れ、広がります。ホーチミンは目の前です。

長々ところまで記してきましたが、実はここまでの過程が私には初体験でかつ驚きであったからでした。海外旅行は誰も簡単に行くものではありませんが、そこに国境があることを否応なく解らせ、かつ他国にはそこに違った文化の人たちが歴史の先で今を暮らしていることを知ることのできる機会です。そんなこと、解り切ったことではありませんでしたが、パスポートを作る時からそれに気づき、空港での出国審査の場を通ることで、国境のあることをはっきりと解らされました。そして、国境を超えると、そこはまさに他国でありました。

ベトナムの、ましてやホーチミンの観光などは、息子から、みるとこないでえ、と言われていたので、期待はしておりませんでした。日本一の観光地、京都でも清水寺と平安神宮、御所、と数えても、いやいや、こう数えてみると、京都の方が見どころはたくさんあると思えます。それでも、ベトナムは見るものすべてが日本と違った文化でありました。ほんの一步、道を歩いてもそれがわかりました。その予兆は、ホーチミン空港での入国審査からもうかがい知れました。見るものは少なくとも、その異文化は、私に一種の覚醒をさせました。

飛行機が空港に着こうとしているとき、CAさんから安全ベルトを締めるようにとのアナウンスがありました。ところが、私たちの席の前の女の人たちが何やらおしゃべりして、指示に従いません。言葉からいうと、ベトナムの人たちのようでした。たぶんベルトを締めなくとも大丈夫と、勝手な思い込みで少々CAさんのアナウンスを無視している風でもありました。そんな機内を、CAさんが二人で手分けしてベルトのチェックに回り始めました。そして、当のおしゃべりおばさんたちの所へ来ると、急にキツとなって、おしゃべりをきつい言い方でさえぎり、ベルトのあたりを指でさししめし、何やら言います。客がベトナム人でなかったら、たぶんCAさんがそんな扱いをすることもなく、そんな扱いをされることもないと思える強権的な状況でありました。すると、客も一度に黙り込み、おしゃべりをやめてベルトを締め、Caさんの指示に従ったのでした。ベトナムのスチュワーデスさんって威張ってるのよね。とその時義理の兄嫁さんがささやきました。トイレに行って帰って来てただけど、通路ですれ違う時って、普通スチュワーデスさんって、客に道を譲って通すよね。でもこうよ。そう言って、肩

を振って歩くしぐさをして見せます。客の方をよけさすのよ。確かにそんな風でした。

その居丈高な物言いのCAさんの、指示というより命令とも言えそうな言辞には、それなりの理由があると息子がおしえてくれました。それは、ヴェトナム航空などで働くには、それなりのコネがないと無理だそうで、彼女らは国の要職にある官僚か共産党員の子女であるはずだということです。ですから、自国民になんの遠慮もしなくていいし、命令し、従えて当然という意識なんだそうです。やはり、そのあたり、中国やロシアとなんも変わらない社会主義国だと納得しました。

飛行機は無事着陸しました。私の緊張は、滑走路にタイヤが接地したとたん、ふっと解けました。一瞬で肩の力が抜けたとっていい。降りてしまえば落ちることはない。そんな意識がよぎったのでした。でも、安全ベルトはまだつけておりました。義兄や義理の兄嫁、妻などはまだ慣れない様子で椅子に腰かけて待っておりましたし、大半の客もそうでした。しかし、慣れた人はもう立ち上がって、頭上の荷物入れを開け、荷物を取り出し始めておりました。私など、慣れないものは反対に、迷惑をかけぬように、遅れぬように、早く用意をしなくてはと、立ち上がりかけました。すると、義兄が、慌てることないでえ、ゆっくりおりたらええんで、といいます。そうです、慌てることはない。そう思って、機体が止まってからバンドを外し、立ちました。一瞬、ちょっとふらっとなりました。貧血でもなく、これはなんだったんでしょうか。義兄が荷物を取り出してきていました。助かりました。

飛行機が滑走路から機体を人の降り口まで回し、扉が開けられると機内の人が一斉に動き出しました。まるで我先にと洪水のようで、もっと普通に整然と降りたほうが早いのに、ちょっと気圧される思いでした。そのあたりが日本人と違うのでしょうか。それとも、私が気が弱いのでしょうか。とにかく降りねばなりません。降りると入国審査があって、早くも身構えてもおりました。人の流れに乗って、少々小突かれながらタラップをおりると、バスが待っておりました。そのバスがまた関空と一緒に、座席がない。皆立っての移動です。また、乗れる人数が少なく、一定の人数になるとドアが閉まり、スッと発車します。次々と回ってくるので待つという言うことではないのですが、置いて行かれるとちょっとイラッとします。バスに乗るとすぐに着き、これじゃあバスに乗るほどもなかったとは思いますが、急いで降りて人の行く方に着いて行かなければなりません。どう行けばいいのか解らないので、とにかく建物の中へ向かって一斉に行進します。せかせかと歩く人、私たちのようにせかせかと歩けない人、皆同じ方向に向かいます。そして入っていった建物が入国審査のフロアーでありました。そこには床にラインが引いてあり、みなそこで待って一人ひとり順番に係りの所に向かいます。審

査にはたとえ夫婦でも、一緒には行けません。並んで待つといえども、そう長くはかかりませんでした。まず義兄が向かいましたが、慣れているので手にパスポートとEチケットシートを持っておりました。すると、係りは女性でしたが、ほんの一瞬じっと顔を見、あとは下を向いて何かチェックしているようです。結局何か言葉を交わした様子はありませんでした。つまり、何か質問されたという風ではなかったのです。私は、少し気おくれしてはいたのですが、沽券にかかわります。平気な顔を装ってすたすたと窓口に向かいました。向かってみると、一段高い敷居があり、その上からパスポートとEチケットシートを渡します。それを事務的に受け取り、パスポートとシートを広げ、それから私の顔を見つめます。きりっとした、何かものを言えば親しみを持ってそうな美人さんでしたが、怖い顔をしているんです。えっ？何か不都合でも？そう思ったすぐに、おおっ帽子かと気づきました。それならそうと言ってくれたらいいのと思う間もなく、彼女は頬を緩め、目を外してパスポートとシートを閉じて、一言も声を出さず、それらを渡してくれました。入国審査はそれで終わりでした。考えてみると、Eチケットシートには帰りの搭乗券のことも、滞在するホテルの名前も、滞在日数、ツアーの旅行会社の名前も書いてあります。入国目的も何もかも解ってしまいます。そして、日本のパスポートを持っています。息子が言うておりました。世界中、ほとんどの国に支障なく入れるパスポートは日本のものくらいなんだ。そうなのかどうかわかりませんが、そのあと税関検査を通った覚えがありません。1階の荷物受取所で荷物を取ると、そのままずると荷物を引っ張り、さっさと前に行く妻の後を追って空港の外へ出て、暑いホーチミンの空気にさらされ、感慨を抱く暇もなく、ガイドさんをきよろきよろ捜したのでした。

日本であれば、普通出口で旅行会社のガイドさんが待っていると思うのですが、ホーチミン空港ではそうではありませんでした。迷いながらも、自力で外へ出てこなければなりません。そんなことは知らないのに、ベトナムの旅行会社は不親切なんだなあと不満に思っていたのですが、ホテルへのバスで、ガイドは空港の中には入れない規則になっていると、聞かされました。今日の同行の人たちからは、それについての不満は出ませんでした。ガイドさんの申し訳なさそうな顔から、たぶん文句がでたりするのだと推測できました。私たちは4人連れでしたから8つの目でガイドさんを捜しましたので、さほど困らず探し出せましたが、私たちが外で待っている間、ガイドさんがウロウロ捜しまわってましたので、相当迷っていた人もいたようです。それでも、市内へ向かうバスが空港の前の道路に到着したころには全員集まり、無事出発できました。バスは大半の席が埋まっており、旅行客は大人数であったことは間違いありません。四十人ほどであったのでしょうか。ちょっとマニアックな海外旅行で、あまり人気のある観光地とは

思えませんのに、よくあつまったと思いました。安かったんです。関東や北海道へ行く観光旅行の方がよほど高い。ところが、私たちが行ったベトナムは雨期で、いつスコールが降っても不思議ではない時期だったので安く設定されていたのだと思います。しかし、幸運にも滞在中は一度も雨に会いませんでした。雨季は終わってるみたいだよと、息子に聞いておりましたので、そうだといいなあとは思っておりました。

それにしてもバスはクーラーが効いており、快適だったのですが、バスを待っている間は暑くて、疲れとともにぐんなりと座り込んでおりました。今朝がたホテルを出るときは、上着と薄手のヒートテックを着こんでおりましたのに、地球を下に降りてくると、こうも温度が違うのかと感じました。それにしても、その暑さが日本とはちょっと違います。湿気が少ないのです。温度は32度ほどありました。それでも日本の方が体にこたえる。息子が帰ってくると、同じことを言っておりました。ベトナムの方が過ごしやすい。ではありますが、バスのクーラーは助かりました。ホッとしました。

ベトナム空港は市内からバスで30分以上離れていたの思います。それにしても、関空や成田よりはずうっと近い。しかし、少なからず驚きました。バイクの数です。ひょいと外を見ると、バイクが何重にも重なって、バスと並行して走っています。それだけでなく、前も後ろも、ずうっと先までバイクが走っています。その先の方を走っているバイクが、信号が赤になっても、交差点を直進していきます。たくさんのバイクですから、流れていくといった感じです。ベトナムってそんな交通ルールなんだろうかと思ってしまうました。日本だって、信号が赤でも、直進可能の小さな矢印が出ていれば走れますから。ところが、そうではなかったのです。

見ていると、赤信号でも直進してゆくバイク群の中に、乗用車がゆるゆると突っ込んできます。すると、直進していたバイク群が動きを止めはじめ、次には全社止まりました。そこへ交差している道路に止まっていたバイク群と車が進行し、次には一杯になって通過してゆきます。まるでサイゴン川の流れのようです。しかし、それは車とバイクの話です。交差点は歩行者もわたっているはず。しかし、それはバスの中からは見えませんでした。車とバイクの群れが交差して流れていく交差点。不思議とクラクションは聞こえません。日本なら、こんな事態に交差した側からクラクションの嵐が起こるのではないかと思ってしまいました。

そんな状態を見たからか、私の抱いた疑問に答えるように、ガイドさんがホーチミンでの道路の渡り方を説明し始めました。

ホーチミンのホテルにそれぞれの方をご案内した後は自由時間になりますが、皆さま方、外へお食事とか観光にお出かけになると思います。その時まず驚かれるのは、このバイクの多さだと思います。そのバイクと車が、交差点で信号が赤になっても停まらず、どんどん走ってきます。それを横切って渡るは、ゆっくり、ゆっくりですよ、走ってはいけません、ゆっくり歩道を歩いていってください。すると、バイクは停まって渡れます。車も停まります。

その説明にびびりました。おぶけたあ。おそろし。義兄夫婦が小さな声で言っております。私たちは実際、それをすぐに体験することになりました。息子の案内で、食事に出かけたからです。その話は後のこととして、バスが動き出すと、ガイドさんからチップについての注意がありました。それが、チップは渡してやってください、しかし、高額なチップは上げないでくださいというものでした。ホテルでボーイが皆さんの荷物を部屋まで運んでくれますが、彼らの賃金はとても安く、チップに頼っているところがあります。しかし、高額なチップを渡すと、彼らは喜ぶでしょうが、それに慣れっこになると、後からのお客様が困ります。ですから大体二万ドン、百円ぐらいにしておいてください。へー。義兄がいいです。ちょっと少ないン違うん。義姉も言っておりました。しかし、私たちが泊まったホテル、ルネッサンス・リバーサイドホテルは五つ星ホテルで、かつ、部屋もホームページで紹介されていたスイートルームであったのですが、その宿泊費が五千七百円ちょっとでありました。それから考えても、例えば千円も渡すのはやり過ぎだとわかります。しかし私は、そのチップを渡すのに失敗しました。

私がボーイさんにチップをあげるのに、なぜ失敗したのか。それは要するに、慣れてなかったからです。いつ、どのタイミングで渡せばいいのか、かいもく見当がつかませ

んでした。一応、用意はしたのです。お財布を出し、中身をみました。お札ばかりで、どれを渡せばいいのかも解らない。だいたい、ベトナムの札は0が多すぎます。それと、額が上のものが札が大きいとか、豪華にできてるとかといった風に、簡単に判別できるようにはできてない。日本で両替したときによく見ておけばよかったのですが、たぶん、そうしても迷ったと思います。あまり流暢ではない日本語での説明を、マニュアルにある通り、長々と説明して、ボーイさんは笑顔のまま、行ってしまいました。不慣れとは、こんなものです。まあ、次があるだろう、そしたら、今回の分も含めて、少し多めにあげればいいと気休めに思って、ボーイさんを見送りました。

チップのことはこういった風でおわったのですが、バスの中でのガイドさんの注意は、まだ続いておりました。

ベトナムでは、日本と違って、たとえ水道であっても、水は飲めません。現地の方は平気で飲んでいますが、それでも時々お腹を壊します。日本人なら余計です。ホテルには必ずミネラルウォーターがおいてありますから、飲用には必ずそっちを使ってください。外出する時も、ペットボトルを持っていったほうがいいです。それから、現地の人が行く屋台か小さな飲食店では覚悟をして食事したほうがいいです。ですから、そんなところには入らないで、ホテルの中のレストランか、ホテルのフロントが進める店に行ってください。それでも多少ボラレルことがあります。大したことではないと思ってください。日本円で百円ほど高いぐらいです。ベトナムでは麺一杯、百円しないぐらいですから、二百円と言われても大したことではないと払って出てください。トラブルに巻き込まれるよりは、安いもんです。

ガイドさんに言われるまでもなく、水は飲めないと知っていました。ですから、ホテルの部屋ではまずペットボトルを開けて、のどを潤しました。すると、持ってきたスマホに、息子からラインが入りました。後十分ぐらいでホテルに着くとのことでした。妻が、先ほどチップをあげそこなったボーイさんの説明通り、電話機の7をまず押して、義兄の部屋のルームナンバーを押し、そろそろ下に降りてと連絡しました。外はまだ明るいのです。日本とベトナムは2時間の時差があります。それでも少し日がかげってきておりました。

下に降りると、フロントがあって、少し広いフロアーになってはおりますが、腰かける椅子がありません。それがルネッサンスホテルの欠点でした。このあと、何度かこの椅子のないフロアーで長い時間待つのですが、くたびれること多々でありました。私たちが降りて、3分ほどで義兄たちが降りてきました。そして息子もそのあとすぐにホテルに入ってきました。息子がホテルに入ろうとすると、ドアボーイがいるんです。彼がすっとドアを開けてくれます。日本ではついぞ見ない風景になりました。黒のスーツ

に蝶ネクタイ、黒の靴を履いて、一人がドアの取っ手に手をかけ、一人が後ろ手に手を組んで、少しおしゃべりをしながら外と中を見ている、出る人はいる人の度にドアをあけます。私たちが入ったときは気がつきませんでした。自動ドアに慣れすぎていました。

息子がレストランに案内してくれるとなって外へ出ると、もう夕闇があたりを押し包んでおりました。この時間にどこかへ行くとなっても、歩くことは無理と思ったのか、息子がタクシーの泊まっているほうへ向かいました。そこにはホンダの中型車が二台泊まって客待ちをしておりました。てっきりそれに乗っていくものと思い込んだのですが、息子に続いて車の横に立つと、中年のガードマンが私を止めました。息子が指を立てて人数を五人と示しておりました。すると、ガードマンが携帯で何か連絡しているようでした。しばらく待ったのですが、その間に先の二台のタクシーは出ていきました。その場所に、なんと運転席の後ろに二列の座席のあるバンタイプのタクシーがやってきたのでした。これなら一台で乗って行けます。

そういえば、ガイドさんが、タクシーの車体の横か上に27・27・27と書いてあるものと、もう一つ37とか言った数字のタクシー以外は乗ってはいけないとっておりました。しかし、もうベトナムになれた息子の案内です。もうなんの不安もなく、車に乗りました。息子はコンドミニアムから仕事先までは必ずタクシーで通うようにと、会社から言われているそうです。ベトナムの交通事情と治安は、それでも解るような気がしておりました。

行った先で何を食べたのか、実は解らないし覚えておりません。ベトナムといえ
ばフォーとパイチャーぐらいしか知らなかったのですが、それも多分食べたのだと思
います。サラダは食べましたから、パクチーも入っていたはずです。とにかくどの料理に
も大量にハーブが入っており、きつい香辛料の香りが鼻と舌を刺激し、料理の味が解り
ません。それはどの料理も同じことで、違う皿と鉢のものを食べているのに、その特徴
が解らない。料理は現地で慣れている息子が頼んでくれましたから、名前も解らないの
で余計です。息子が、最初に見た、写真を直接貼り付けたメニューを指さしながら、な
んとかかんとかと言って、チョウトイと言っておりました。だからといって、名前が
わかって、判別がつくかと言ったら、それも怪しいものです。

ただ、ビールの飲み方はびっくりしました。ホーチミンでの一番人気はサイゴンビ
ール、三番目が333で、これはバーバーと呼びます。では2番目は何かというと
、日本の麒麟であったと思います。ベトナムで人気の外国ビールは、かつてはドイ
ツビールでした。そこへ割り込んで行ったのが麒麟でした。しかし、ベトナムビール
はとても安く、麒麟といえどもそれには太刀打ちできない。ご当地ビールは、なにし
ろ缶ビール一缶が五〇円ほどですから、その倍を優に超える値段では、いかに日本のビ
ールといえどもかないません。そのうえ、ベトナムのビールの飲み方が日本とは全く違
います。お店で酒好きの義兄がビールを頼むと、まず持ってこられたのが普通の大き
さのグラスコップで、それに大きな氷が山になって入っておりました。そのあと、全く冷
やされていないビールが持ってこられました。銘柄はサイゴンビールとバーバー。
私は飲めませんので味は解りませんが、義兄はベトナムの飲み方をかなり気に行ったよ
うでした。現地の方は、氷が解けて薄まった、うすいビールを水変わりに飲むのだそう
です。まずはビール。暑いベトナムで水変わりに飲むのが、こベトナムビールだそう
です。その飲み方を気に行った義兄は、このあと氷とビールを何本も頼み、しまいには
嫁さんに、ババアがバーバーを飲んでるなんて軽口を行って叩かれておりました。

私たちが息子に連れられて行ったこの店は、周りを見渡すと外国人が多数座っている
、観光客に人気の店だそうです。

さて、その観光客にも人気の食堂へはタクシーで行ったのですが、ふつう日本では
通りに面したところに店の入口があって、そこから中へ入れるものですが、息子の案内
してくれたところはそうではありませんでした。表店(おもてだな)という言い方が江戸
時代にはありましたが、通りに面した表店がびっしりくっついて立っている、その一つ

が店もない、自転車だのバイク、子供のボールや靴置き場が無造作に置いてあるトンネルのような通用口になっており、座り込んでいる老婆や騒いでいる少年の横を、まるで普通に道を歩くように通って、中へ中へと進んでいきます。息子は平気で歩いていきますが、わたしはつい気が咎めて、お年寄りに日本語でこんばんわと挨拶してしまいます。子供はまじまじと私たちを見ておりました。しかし、不思議と異臭はしませんでした。私たちはもう、すたすた行く息子に置いて行かれないように早足になります。すると、薄暗い裸電球の明かりに下、民家の勝手口ほどの入口から、平気で中へ入っていきます。人の家に勝手に入り込むようで、大丈夫なのかと気をもんでおりましたが、すぐに薄汚れて古びたコンクリートの会談をぐるぐる巡って上がっていきます。大いに肥満気味の義理の兄嫁は早くも息を切らせ、膝に手を添えてでなければ上がれません。そうやって上がってきたのが、当の食堂でありました。入口の通路も狭く、人がやっとすれ違えるほどしかありません。照明も、裸電球がぶら下がっているだけです。しかし、ネオンでしょうか、当節ですからLED証明でしょうか、イルミネーションが赤青の原色で光っておりました。BGMなんてなく、人の話し声がさざめいており、活気のあふれていることは間違いありません。しかも多言語でありました。私たちの横は明らかに中国語、その向こうは白人、ベトナム語も飛び交い、その中を食堂のボーイさんが寡黙に飛び回って鉢やら皿、ビールを運んでおります。その人たちの上に灯の入った雪洞が連なっておりました。

私たちの頼んだものが来るまで周りを見渡してみると、ガラスのケースの中にこの国の仏さまとその従者の何やら獣の像が鎮座しておられました。そして私の後ろには荒縄でくくられた素朴な皿や鉢が山になって置いてありました。それはそれで売り物なんだと思います。鉢は蓋がついており、昔のうどん鉢そのものです。皿は厚く、かなり重いものでした。それらを手に持ったりしてしていると、割ったらいかんから、置いとくと妻に怒られました。しかし、ガラスケースの中の、誰も拝まない仏様の異国の微笑みが、薄暗い明かりの中で美しいと思えました。

私たちの横のテーブルに別のグループが座りました。この人たちも静かではありませんでした。ビジネスチャンスをどうやってつかむかと声高に語っている日本人でした。彼らはまるでかつての猛烈社員のようなものでした。

氷が解けて薄まったビールを清涼飲料水のように飲んで、ホーチミンの甘めの味のフォーを空心菜のトッピングで食べ、鶏肉料理をつまんで、特有の臭みで有名な魚醤をちょっとつけて生春巻きを頬張り、まるで現地の人になったように食べて飲んで、あっと驚くほど安い代金を払ってその日の晚餐は終わりました。帰りもタクシーかと思ったのですが、息子が歩き出します。私たちも歩くしかありません。どこをどうある来て

いるのか解りません。しかし、あの恐怖の道路横断を初めて経験することになりました。息子に付いて歩く歩道には、たばこの吸い殻が一面に散らばっています。狭い間口の、セメントつくりではありますが、バラック作りの闇市のような店の前で低いテーブルに食べ物を置き、プラスチックの低い椅子に腰かけ、箸をもって食べています。道路はバイクが排気ガスをまき散らし、道路一面流れていました。アーケードがあって、見ると日本のデパートがあり、異空間のように洗練されたディスプレイが温かみのある照明で浮き出ております。その向こうにホーチミン一番の老舗ホテル、サイゴンホテルがありました。そこまで行くのに、今バイクが流れている道を渡らねばならないのです。信号はありません。歩道は一応あります。すこし左右を見ていた息子が、まるで川を渡るより平気な顔をして、一歩前に出ます。続かねばなりません。走らないように、歩くよりゆっくりと、左右を見ながら大人4人がそろそろとわたります。前をバイクが走り抜けますが、それでも歩きます。後ろはどうなっているのでしょうか。義兄嫁と妻が付いてきているはずです。一緒に前へ。右目の方はバイクが停まってくれています。そして、渡り切ったのでした。そうだ！と私は思ったのでした。手を挙げて渡ろう。良い子は手を挙げて渡りましょう。そのあと、道路を渡るとき、私は本当に手をあげて渡りました。息子が、そんなことせんでも大丈夫だからといったのですが、せめて自己防衛のためとそうし続けました。

私がホーチミンで見た、洗練された日本のデパートは高島屋でした。それに気がついた時から、私たちは日本人経営のレストラン、スパにも出会うことになります。

行きはタクシーに乗ったのですが、歩いて帰ってみるとホテルはそう遠くかありませんでした。その時私たちは半そで、夏用パンツ、薄い靴下と夏の洋装で歩いていて、それでも暑いとは感じませんでした。ホーチミンの雨期の激しいスコールにも合わず、さほど汗もかかず、幸運であったと思います。そして、幸運は実は出発の時にもありました。台風二十一号です。私たちの出発日は十月二十七日。台風は前日に西日本を襲い、本当にやきもきさせながら、関西を通り過ぎ、関東へ抜けていったのでした。飛行機の旅は快適そのものでした。ところが、帰りの日、十月三十日は次の台風二十二号が日本を襲いそうというニュースが飛び込んできておりました。しかし、その情報を得ようとしても、ホテルのテレビは不鮮明な画像とベトナム語の番組か、衛星放送で映画と稚拙なアニメしか映りません。この不鮮明で、音質も劣悪なテレビは、大画面ではありましたが、それは放送局の問題か、テレビ自身の問題か、知りませんでした。私がこのテレビで唯一あてにし、熱心にみた番組がNHK・WORLD・TVであったのですが、これも日本で見る画質ではありませんでした。それでも、デザインはすっきりしてました。なにしろ、サムスンですから。

私たちをホテルに送り届けて息子は帰りました。その時も、彼は歩いて帰りました。部屋に上がる時、エレベーターは降りる階を指定するのに、カードキーを刺さなければなりません。これは日本では、スイートルームに宿泊する時にしなければならないやり方です。これは以前経験していましたので、そうなんだと思っただけでさほど戸惑いませんでした。そういえば、ホテルにチェックインする時、必ずクレジットカードを持ってくるようにと、息子に言われておりました。そこで、クレジットカードなど大嫌いな私が、一枚だけ持っているカードを持参しておりました。すると、案の定、チェックインの時、クレジットカードを見せるよう、要求されました。ホテルの代金はもちろんツアー料金の中に含まれているのですから、なんで必要なのかわかりませんでした。例えば部屋の有料の飲み物を飲んだ時とか、ホテルで食事したときは、その場で現金払いしないでレシートにルームナンバーと名前のサインをしておきます。そしてチェックアウトとなってクレジットカードへの請求書を渡され、サインしてOK!というて終わるのだそうです。諸兄諸氏はもう当然ご存知のことと思いますが、書き加えて置きます。

ベトナムのホテルの一番の特徴は、冷房がガンガン効いていることです。外から帰ると、はじめは気持ちいいのですが、しばらくすると寒くなってきます。これも事前に、何か部屋着を一枚持っていたほうがいと息子から聞いておりました。それほど寒いのです。22度ぐらいの設定であったと思います。エアコンですから、温度の設定ぐらいできるだろうと思っていましたが、いかにパネルの温度設定をあげても寒いのです。妻は暑いのは嫌だと言いつ張りましたので、そっと、黙って、エアコンのスイッチを切りました。

ホテルの部屋のことではなくなったのもう一つ。便座のことです。これが冷たい。ウォッシュレットに慣れている私たちは、低い室温によって冷やされた便座には、思わず腰が浮きました。それと、豪華なタブの上の付いているシャワーから、いつまで待ってもお湯がでません。水栓からも、お湯が出るのに相当時間がかかります。お湯が出るようになって、いつまでも生ぬるく、なかなかお風呂に入れませんでした。これも残念なことでした。

室内の照明は日本のホテルよりも明るく、その点、居心地がいい感じでした。カーテンを開けると、向かい側のビジネスビルは所々明かりが消えているだけで、まだ大半が明るいままでした。そのビルとホテルの間の広い道路には、川を流れる笹船のようにポツンポツンと車が走り、洪水のうねりのようにバイクがそれを取り巻き、連なって走っておりました。このベトナム一番のビジネス都市ホーチミンは、猛烈に動いておりました。

私にとって残念なことは、リバーサイドホテルという名前とは裏腹に、サイゴン川が全く見えなかったことでした。リバーサイドホテルに接した片道三車線の広い道路の向こうに川は流れておりましたのに。

日本と同じように、南北に長いベトナムは北と南では気候も文化も食習慣も違うのだそうで、その辺りは日本とよく似ているところだと思いました。ベトナムは世界第二位のコメの輸出国であり、コーヒーの有数の生産国です。コーヒーの生産量はというと、これも世界第二位です。ですから、ベトナムにもこの国独特のコーヒーの入れ方が、昔からあるようでした。ベトナムでのやり方はネルドリップとか紙フィルターとかで入れるのではなく、フランス式のアルミとかステンレスの底に穴をあけたフィルターをガラスカップに乗せ、上からドリップポットの湯を注ぐのです。ところが、さすが産地だけあって一度に入れるコーヒーの量が半端なく多い。カップに乗せるドリップフィルターもカップのような形状なのですが、これに三分の一から半分の量を入れます。また、フィルターの穴も目にそれと解るほどの大きさですからそれを通して、たぶんコーヒーの細かい粉になった部分は、下に落ちるものと思われます。また、粉の量が多いので、

お湯が落ちるのに十分以上かかります。ですから、とても濃厚なのです。濃い！はっきりと舌でわかる濃さです。しかし、コーヒー特有の苦さはさほどでもない。こうした淹れ方のコーヒーに、ベトナムではコンデンスミルクをこれでもかといれます。この練乳はあらかじめカップに好みの量入れておき、これにコーヒーを淹れるわけです。こんな風ですから、このコーヒーはまるでコーヒーキャンディをなめているみたいです。見ると現地の人でも、中にジャスミン茶、蓮の葉茶などを口直しに飲んでいる人もおりました。いや、そうだと息子が教えてくれたので解ったことです。だからでしょうか、今ホーチミンでは豆乳ラテが流行っているそうです。やはり、甘いもの好きの南の人も、最近はずいぶん薄味になってきているとか聞きました。

そのベトナムコーヒーを、ホテルの朝食で味わいました。このルネッサンスホテルの朝食はバイキングですが、豪華なことでも有名です。確かに品数も多く、果物の種類もパンもたくさん並んでおりました。そういえばベトナムはフランスの植民地でしたから、パンもおいしいそうです。そのパンと一緒にベトナムコーヒーを飲むと、日本人にはやっと耐えられる甘さであって、これは甘いです。コーヒー自体はブラジル産と違って、苦みの薄い、香りも甘く、普通に淹れてもおいしいものですから、たくさん買ってきました。これはお土産ではありません。私用です。断じてあげません。

ルネッサンスホテルの朝食は豪華なバイキングです。日本人を意識してか、みそ汁とご飯、お漬物も置いてあります。ほかにも、中華もフォーもありました。しかし我々は、ベトナムまで来て日本食はないだろうと、ぽっと出の田舎者のようにいろいろ見て回り、珍しいものを物色して皿に乗せ、コーヒーと一緒にテーブルで賞味したのですが、フランスパン以外は日本のパンと同じで、違和感なく食べました。といいますのも、フランスパンは外が硬すぎるぐらい硬く、中はもっちり。つまり、本当のフランスパンで、柔らか好きの私には口に刺さる思いでした。誤解なく。おいしいのです。本格派のフランスパンなんです。ですから、私には食味しにくかっただけなのでした。ですから、クロワッサンはとてもおいしく、三個食べて、ああ、カロリー高そうと後悔しました。後で聞くと、ここでは自家製のヨーグルトが濃厚でおいしいとか。翌日はこれを捜し、壁のガラス戸の後ろに並んだびん詰のヨーグルトを、これも二個手に取って持って帰ると、なんかうれしそうねと妻に言われてしまいました。おいしい？と義理の兄嫁が訊きますので、おいしいと答えると、これも二個もってきて義兄と食べ、もう一度取りに行ったほどでした。朝食のビュフェは国際色豊かで、牛のような肩幅に派手なシャツな白人男性と、肩にたくさんのシミを置いたシニアのご婦人や、ちょっと目姿の怖い中国人カップル、明らかにベトナムの富裕層と思われる夫婦の方などもおられました。

。このビュフェを出るときはどうしたのですか。入る時、カードキーを見せたと思います。たぶん、それだけだったと思います。日本語の通じるスタッフがいると聞いておりましたが、だめでした。食事の後、妻と義兄が、つまようじはないんかなあと言い出しました。爪楊枝？見回してもありません。しかし、英語でと思っても浮かんできません。だいたい英語に爪楊枝なんてあるのでしょうか。と知っているうちに、義兄が手を挙げて、メイドさんと呼んでいます。そして、唇を持ち上げ、歯を見せてほじくる動作をして見せ、ちょうだい、といいました。すると、メイドさんは早足で引き返し、手に何本も持って帰ってきたのです。サンキュ、サンキュと礼を言い、義兄はちゃあんと目的のものを手に入れたのです。妻も義理の兄嫁も大爆笑です。すると、義兄も、これよ、これで何でも通じるんよと、歯をほじる動作を繰り返します。また一層の、場をはばからぬ大爆笑でした。そういえば、息子が、ベトナムの爪楊枝は細いといっていたと、その時思い出しました。で、後でメイドさんに訊いてみました。爪楊枝を指して、What do you call this one? 当惑した面持ちで首をかしげます。What is this name? すると、メイドさんは爪楊枝の包装をはがし、中を取り出して渡してくれました。使い方を訊いたとおもってのことだとわかり、こっちも、Sorry と詫びて、それを頂きました。言葉も解らず、こんなところで働くのは気苦労の多いことと思います。それでも一生懸命サービスしようとしてくれるメイドさんに感謝します。ひと昔前の日本人みたいでした。義理の兄嫁も妻も、ベトナムの果物って見たことないものばかりだけど、おいしくないな、と言いながら席を立ちました。私もそうおもいましたが、なにか申し訳ないような気がして、ごちそうさまといいながら、部屋に引き上げました。

その朝、ツアー会社のオプション観光で、ベトナム戦争時のゲリラ戦を戦ったクチの地下道と戦争証跡博物館、それに加えてスパというのがあったのですが、それには参加しませんでした。およそ三十年前、ベトナムは戦争をしていたことを、私たち世代は知り抜いています。あの戦争はあまりに悲惨でした。ピューリツァー賞を取った、裸の女の子が泣きながら駆けている写真は、まだ脳裏に焼き付いています。それを直視しない我々がいけないのかもしれませんが、やはりまだ目をそむけてしまいます。それにしても、戦争の傷跡とスパの組み合わせは、たくましいのかなあと、つい思ってしまいました。自由行動の私たちも、スパには行ったのです。息子が、自分も行きたいと予約し、一緒の行きました。義兄夫婦の料金は彼ら持ち、私たち夫婦は自分たちの分と息子の分も。ちゃっかりしています。まあこのために行ったのですから、仕方ありません。それに、ホーチミンといえども、観光にさほど期待はしておりませんでした。こちらの情報不足もありましたが、そんなに見るとこないでえと息子から聞いてもいましたから。それと、見るところはだいたい決まっているから、重なると思うよとも聞かされてきました。いまもよくは解っていませんが、サイゴン大教会、オペラハウス、中央郵便局、なんとか公園、などはまとまって一地区にあり、統一会堂がそれとは気付かない形でこの地区の端っこにあったと思います。それにしても、これら、フランス統治下の洋館づくりの建物は、なんともやさしい感じがするのです。色使いでしょうか、様式からでしょうか。圧迫感のない外観なんです。そしてその一角に工事中の現場があり、その入り口に、英語で日本の協力で地下鉄を作っているという看板がありました。それにしても、これらの建物を見ても、建物自体はこうだと解っても、それ以上の印象はないのです。それは、それ以上の思い入れがないからでしょう。物語が解らない。仕方のないことかといまも思っています。

さて、スパに行きました。

スパって何と言われそうですが、要するに全身マッサージのことです。ホーチミンでも有名な、つまり、ぼらない、まじめにやってくれる、良心的なスパは予約なしでは無理なんだそうです。そこに前の日から予約しておいてくれたので、昼前に出かけたのでした。すると、案の定、間口の狭いビルに入っていきます。フロアーは狭く、それでも何人かが掛けて待っていました。私たちも待ったのですが、その間にアンケートのようなものを書かされました。肩とか膝とか腰などの、どこか痛いところはないか、強いマッサージを希望するか、弱いほうがいいか、という事前調査といったものでした。そのアンケートは、何も思わず書いたのですが、日本語でした。私はもちろん、全部真ん

中の強さを選びました。スパでは、腰を強く反らせたり、膝を曲げて押さえつけられたり、首をぐりぐりねじられることは知っておりましたから、悲鳴はあげたくなかったのです。アンケートを書き終わると、全部を集めて息子が受付へ持って行ってくれました。すると予約ですから、すぐに上に案内されました。またしてもぐるぐる階段をめぐって上がっていきます。多分四階ぐらいまであがったと思います。そこは脱衣場でした。ロッカーの中に病院での検査着と同じものが置いてあり、全部脱いでそれに着替えます。全部です。これも病院の検査と一緒にです。

着替え終わると、またもう一階上がって、暗い中を部屋に入り、何台か並んだマッサージ台にうつ伏せで横になります。すると、しばらく待って、多分若い女性だと思われるセラピストがベトナム訛りの英語で声を掛けてきて、マッサージが始まりました。うつ伏せのまま上を脱がされ、背中に何やら暖かいオイルが手の平で塗り広げられ、背筋、肩、肩甲骨の間を何往復も押さえられます。それから肩や脚、足の裏、腕から指の先までマッサージされます。その時、横で義兄が、いたた！と声をあげました。腰を反らされ、足を強くもちあげられ、足のツボを押さえられ、それが痛くて声が出たというおりました。私はそんなことなく終わりました。といっても、何か熱くて硬いものが、背中中を動き回り始めたときはびっくりしました。あとでそれが温めた平らな黒い石であることが解ったのですが、オイルとともに熱いものが動くと、風呂さえ熱いのが嫌いな私は、じっと我慢の子でありました。それは仰向けになってからも施術され、まずみぞおちに石が置かれてじっくり温めた後、お腹のまわりをすべり、下腹を温めます。私が熱いのですから、女の子も手の平が熱いではなかったでしょうか。しかし、これがベトナムスパのやり方のようなのでした。そして、一時間、これが続きます。思えば大変です。後は座りなおした私の体を乾いたタオルで拭き、蒸しタオルでふきなおし、オイルを取ってくれて、上着を着て終わりでした。立てると、ちょっとフラツとなりました。部屋は暗くて、施術してくれた子の顔は見えませんでした。これもちょっと感謝でした。あんなに真面目にやってくれたのですから。私はマッサージなんて初めてでした。

サイゴン大教会は改修中で、中へは入れませんでした。そのすぐ近くに中央郵便局もあり、オペラハウスもあったと思います。名所旧跡を巡るなら、ホーチミンはあっという間にすべてが見てしまえます。しかし、そこへ行くまでの道は東京の下町と何にも変わらず、口を閉じた異国の人々が異分子を見る目で、私たちを見ているだけです。だが、この道の汚さはどうでしょう。たばこの吸い殻がコンクリートの敷石の隙間に吹き溜り、散乱しています。横道に入ればなおのこと。たばこの吸い殻、プラスチックの破片、紙屑、ありとあらゆるものが散らばっています。そして、狭い店先の歩道にはみ

出して、薄汚れた制服を腕までまくり上げて煙草をくわえたガードマンが、お風呂の椅子のような背の低い椅子に座り込んで私たちを凝視しています。ガードマンがいるのは全部の店でそうでした。ベトナムでは国民の就職先を確保するために、必ずガードマンを雇わなければならないと決まっているそうです。それと、万引き、置き引き、ひったくりは常習的で、そのためにもガードマンはやとわれているのだとか。ホーチミンにも日本のコンビニは進出しています。水を買うために、そのコンビニに入りました。中の品ぞろえは日本とさほど変わりませんが、値段は日本の半分ほどかそれ以下でした。そんな店内の品物を見て回っていると、一人、後ろに手を回し、足を広げてじっと立っている若い男の店員がおりました。その若い人は、コンビニの制服にも関わらず目つきは鋭く、じっと監視していることは一目瞭然でした。穏やかで温厚に見える国民性と思えますのに、やはり警戒は怠ってはいけないのかと思い返しました。

これはベトナムから帰ってから知ったことですが、息子の同級生がマレーシアからの人材派遣会社を企業して、たくさんのマレーシアの人を日本に送りだしているのだそうです。その子がお母さんに、よく働くし、頭も良いんだけど、ちょこちょこ悪いことすると、善良で悪いことは全然しないけど、働かないのとどっちがいい？と訊いたそうです。どっちもどっちだと思うよと答えると、うーんと考え込んで、こんどベトナムにも行ってみるわと行ったのだとか。翌日でした。妻が観光会社のバスの自分の席に、ちょっと良い帽子を置いて観光に出たのですが、帰ってみると帽子が失くなっていました。まさに忽然とです。その時は気が付かなかったので、捜したり、なくなっていると騒いだりはしなかったのですが、ホテルで気持ちの悪い思いをしたのです。ベトナムは日本じゃありません。

スパの後、昼食に行きました。今度は明るい、日本の喫茶店のような雰囲気のお店でした。そこまで少し歩いたのですが、その時、同じツアーで来ている女の子二人が、ホーチミン高島屋の前の歩道を楽しそうに話しながら、向こうへ向いて歩いていっておりました。スラッとスタイルにいい子と少し背の低い、かわいい感じの子の二人でした。それに気付いたのは義理の兄嫁でした。ほら、と言われて二人を見ると、私は、地球を歩くという本のことを思い出しました。女の子二人はホーチミンの街を、案内者がいなくても自由に歩いていました。どうして日本の若い男たちは、異国へ行かないのでしょうか。観光でも良いじゃありませんか。観光は名所旧跡巡りと他国の食べ物を食べることだけではないのです。知らない国の文化と人に出会うことなんです。行ってみなければ解らない、自分の目で見る、それが観光であると思います。

食事とスパが終わり、それなりに観光もして、ホーチミンですることはほぼ終わった感の二日目でしたが、実は朝食の後、ラッキープラザという息子から聞いていたお土産を売っているマーケットへ四人で向かいました。ここはまずまず心配ないところと聞いておりましたので安心していたのですが、それでも

Please give me a discount price! ぐらいの英語は復習しながら行きました。とにかく、道路をわたる勇気がありませんでしたから、街角を曲がって、また曲がって、広い公園のようなところに出て、とにかく道路を渡らないようにしてその店を捜しました。すると、公園の広場に制服と思われるおそろいの白いアオザイを着た女学生の集団が、嬉しそうに笑いあっていました。そして、その中の何人かがベトナムの舞踊だろう特有の身のこなしで、少し踊ってみたりして、また笑いさざめいておりました。私たちは、中央郵便局の前でこの子らの卒業記念写真の撮影するところに出会いました。1,2,3とでもいってるのでしょうか、女の子たちは掛け声とともに一斉に飛びあがる撮影の仕方でも撮影したりしてましたし、男子学生は帽子を高く投げたりして写しておりました。それについて嬉しくなって、私が拍手して祝福すると、まわりの観光客からも拍手が起こり、女学生たちが恥ずかしがって一度に逃げていき、またその騒動を起こした私もびっくりして、急いでさりげない風を装って立ち去りました。つまが、もう！と怒っておりました。

そのことは後のことで、ラッキー市場を捜して公園を行くと、地下鉄へ降りて行くような入口があり、そこにガードマンが立っておりました。それが何か所かあります。なんだろ？と思っていると、それは公衆トイレだと息子が教えてくれました。入口のガードマンが料金を徴収するのだそうです。ベトナムは公衆トイレは有料なんです。しかし、それなのに汚い。だから誰も使わない。

ラッキーは公園の通りの向こうに在りました。幸い、車やバイクがすくなかったので、頃合いを見て走りました。

ラッキープラザもやはり細長いビルで、まず階段を上がらなければなりません。中に入ると、入口から整理の付かない乱雑さと、とにかく強烈な色彩が目飛び込んできます。その一角に、ガラスケースののちに腕時計を並べているところがあるかと思うと、絹だと称するスカーフ類と布製品の小物、民芸品にベルトと財布と、一杯にならんでいます。その一つのコーナーにキーホルダーと革の品物を並べているところがあったのですが、そこで義兄が捕まってしまいました。女店員が通りがかった義兄の腕をつかん

で離しません。まるでごきぶりホイホイに捕まったごきぶりのようです。ちらっと品物を眺めて立ち止まっちゃいけないのです。品定めなんかもっての外。新宿歌舞伎町の客引きの方がもっとおとなしいと思ったほどでした。私たちはスーッと流し目で品物を見、よどみなく歩いて奥へ奥へと行きました。義兄は180cmを優に超える身で、体重は75kgの、年の割には引き締まった体格ですから、少々のことでは動じないだろうし、なにか悶着に巻き込まれることもないだろうと、放っておきました。案の定、低い声で何か言って、義兄も私たちに合流できました。ところが、店の裏口辺りまで来て妻と義理の兄嫁がつかまりました。スカーフを見始めたのです。途端に、1000円、安いよ、絹、ベトナムの本物の絹、と片言の日本語が飛んできて、女店員二人が妻たちから離れません。手に持っていたスカーフを離すと、こっちは安くて品物がいいよとそれぞれの手に握らせます。安くするよ、安いよ、の連呼です。私は、どうやればこの攻勢から逃れられるかを考えておりました。女店員の目がそれた時、手のスカーフを置いてさっと逃げる。私が妻と義理の兄嫁の二人と女店員の間に入り、引き離して逃げる。義兄に睨んでもらう。そんなことを真剣に考えていると、妻が二枚のスカーフを選んで、お土産に買うと言い出しました。ずっこけそうでした。一枚1000円で、二枚だから2000円と言うじゃありませんか。No! too expensive. Half price please! もうブロークンもいいところです。で、結局間の1000円ではなく、1200円で買うことになり、24万ドンを支払って決着しました。ところが、義兄が帰りにまたキーホルダーの所でつかまってしまいました。義兄もたくさんの人にお土産が必要だったので、そんなものを欲しがっていたのです。交渉は義兄らしく、店員の言う金額にただくびをふるだけ。そして、これも半額になりました。支払ったのは3000円。一個500円で、計12個。これには義理の兄嫁が矛先を向け、誰にあげるん? たかいでえ! たこない、一つ500円にさせたんやから。たかいわ。そうは言いながら、兄嫁もスカーフを妻同様2枚買っておりました。妻より高価なスカーフを選んでおりましたから、支払ったのは1500円でありました。そして、私たちは息子に嘆息されたのでした。一階なんかはぼったくりで、四階ぐらいへ行けば安心だったのだということです。市場も店も、表にあるのはぼったくりで、中へ入れば比較的大丈夫なんだそうです。私たちが買った物がどうなのかと思うと、もう疑わしくてなりませんでした。

お土産物は、元中央郵便局の中でも買いました。お昼から歴史博物館、サイゴン大教会、中央郵便局、人民委員会、ベントイン市場と巡り、夕方から水上人形劇を見て、サイゴン川ディナークルーズを楽しんだのでした。しかし、否定的なことを言うようですが、楽しめたのかなあ。市内観光はすでに息子の案内で済ませておりました。そのほうが楽しかった。時間は自由だし、買い物もできたし、歩き回ったので疲れはしましたが、道を歩く方がホーチミンの普通の生活が見られました。歩道に乱雑に放り出されている店の飾りつけと棚、マネキン、ショーウィンドウの枯れた花。車の走る道路は土ほこり舞いあげ、排気ガスのおいで息苦しく、足元はたばこの吸い殻だらけ。広い歩道に接地されたごみ置き場の貨車ほどもある入れ物の下がさびて腐って、大きく穴が開いていました。そこに山になってゴミが放置されています。入れ物の横も粗大ゴミの山です。それはどこへ行っても同じでした。そしてその横をバイクが走ります。なんてことだと思いはしましたが、不思議と嫌といった気持ちが起こらない。なにか、考えさせられてしまいます。これは、日本が失った活気ではないかと思ったのです。ベトナム国民の平均年齢は三十三歳。平均月収三万円。物価は日本の三分の1。平均年齢以外は付け足しですが、この国は若いのです。不幸なことに、あの戦争のせいで老人も当時の働き盛りの人たちも、大人は皆死んでいなくなってしまうました。その後、貧しい時代を懸命に生きて学び、今があります。これは、第二次世界大戦後の日本の様相と全く同じ、団塊の世代の我々が生きてきた時代と同じではないかと気付いたのです。ですから、余計に懐かしいような感じさえします。この活気と混乱と勃興は、この国ではまだ続きます。日本はもう、このカオスは終わった国です。

午後の市内観光は、もう済ませたところを回るので、退屈なものではありませんでした。しかし、市内巡りのバスの中で、私たちはあの女の子二人に会いました。同じツアーですから当然ですが、彼女らはすぐ横の席に座ってました。彼女らに声を掛けたのは、義理の兄嫁でした。さっき高島屋の前を歩いてたわね。そう声を掛けられて、嬉しそうでした。そのあと、私たちとこの子二人は行動を共にします。キャピキャピいながら、嬉しそうに付いてきました。水上人形劇も、このあたりが一番よく見えるとガイドさんに案内された列に、一列に横並びに並んでみました。水上人形劇は、水面をぐるぐると人形が回りまわります。まるでひよっこりひょうたん島のようなようでした。時間は一時間半。この人形劇はハノイでもやっているようで、ベトナムの伝統であるようでした。

この後、サイゴン川ディナークルーズに向かいます。

水上人形劇の劇場を出ると、もう真っ暗でした。そこからバスに乗り、船着き場まで行って乗り込んだのがボンサイ号でした。この船のディナークルーズはYouTubeにもあるのですが、YouTubeほど料理は良くなく、ディナーショーも船の騒音で良く聞こえませんでした。しかし、日本向けを意識しているのでしょうか、ベトナムの曲の最後に演歌がうたわれました。しかし、北国の春とは場違いの感でありました。

この船に乗ってテーブルに付く時、また兄嫁が、ここ、ここ、と女の子二人組を呼びました。テーブルはどれも四人掛けなので後ろの席に座らせたのですが、なんか嬉しそうで、いろいろ話してくれました。それによると、彼女らは宮城から参加しており、飛行機は仁川経由で、トランジットで乗り継いだのだとか。その乗り継ぎまで三時間あったけれど、空港の中では歌も踊りもあって、楽しかったといいます。仁川空港のアジアのハブ空港としての地位を守るために、旅客を退屈させない工夫と努力をしているんだと知った思いでした。聞くと、帰りもそのルートだそうで、仙台空港は地方空港ではありますが、韓国との直行便はあるようです。調べてみると、高松ーソウル(仁川)も飛んでいました。私は行かないですけどね。

この子たちは、私たちがこの子たちを見かけたその前の時間に、ツアーの一環でしょうか、ホーチミンのあのバイクの激流の中を、当のバイクの後ろに乗って走ったのだそうです。バイクタクシーです。若いイケメンの運転手にしがみついて疾駆したそうです。ヒエー、怖いことなかったんえ。阿波弁丸出しです。怖かったあ。そう言って二人ともうなずいていました。身を守るものはヘルメット一つです。信号が変わってもなお走り抜けるバイクの中を、横断するのでさえ命懸けと思っているのに、若いってそんなことが出来るんだと聞いていました。それにしても、道を人が横断し始めると、一応車もバイクも停まってはくれますから横断は出来るのですが、前に書きましたか、停まらず人を跳ね飛ばす車があります。青いナンバーを付けた特権階級の車です。そしてその車は人をはねても罪にはならないのだそうです。そんな車もあるというのに、怖い話です。

船が動き始めると、料理が出てきました。そこで何を食べたか、これも良く覚えておりません。しかし、私たちの向こうで、歓声が起こり始めました。船に乗っているのは私たちツアーの者ばかりではなく、一般のベトナムの人も乗り合わせているようで、その人たちが母親の喜寿(?)の祝い、誕生日のお祝いをしているのでした。ベトナムは老人を敬います。時々大歓声でした。ディナーショーの人たちも、この人たちのリクエストに応じて、お祝いの歌を歌っているとのことでした。すると何かお花に形作ったチップを女性歌手や伴奏者に渡しておりました。おひねりです。そんな船内を見て回っていた女の子たちがテーブルに帰ってきたとき、背の高いほうの女の子が、ポンと私の両肩を叩きました。私はあまり話し上手ではありませんから、義兄が笑わすような話を彼女らにして楽しませておりました。そんな芸当は私には出来ません。阿波踊りの踊り方の身振り手振りをおどけて見せる義兄の横で、笑っていただけでした。そして、この人は、当地では有名なスイミングコーチで、その奥さんはピアニストであり、高名なピアノレッスンティチャーだと紹介しただけでした。ですから、そんな親しみを込めたことをされるとは思っていないませんでした。

食事も終わったあと、この子たちが上行こ、うえいこ、といいます。少し足元の怪しい私は、ちょっとよたよた階段をあがり、妻や義兄夫婦と二階に上がりました。二階と言ってもテラスのようになっている、川風が心地よかったです。ベトナムでも若い人は同じなのでしょう。ファンキーな帽子を横にかぶり、カラフルな模様のパンツと派手なシャツを羽織って何人かが、笑い騒いでおりました。わっ、イケメン！

わっ、イケメン！二人が小さく騒ぎます。ふーん？としか思わなかったのですが、若い女の子にはイケメンに見えるのでしょうか。一緒に写真撮らせてもらったら？

エエー？恥ずかしい！と言った会話の後、義兄嫁が男の子たちに、この子らが君たちと写真取りたいって言ってるんだけど、とってもいい？と日本語丸出しで言いました。うん？日本語ですから解らなかったみたいです。 Those girls want to have a picture taken with you. Is it ok?

通じたでしょうか。ブロークンイングリッシュ炸裂です。船のエンジン音で聞き取りにくかったと思うのですが、私が女の子たちを指さすと、ニコニコ笑ってオケーと言ってくれました。picture、with youでだいたい解ったのでしょうか。おいでおいで。兄嫁が言うと、満面の笑みで二人が男の子たちの前でVサインです。それを大急ぎで私のデジカメで撮り、ふたりの内、一人が持っていたデジカメを受け取って、これも二回シャッターを押しました。本当に嬉しそうでした。義兄嫁が男の子たちに、ありがとう！と礼を言うと、男の子たちも楽しそうに笑ってました。

写真と言えば、わたしもたくさん撮りました。女の子と義兄が嬉しそうにしている写真も取りました。ところがその時だって、二人の名前もまだ知りませんでした。最終的には撮った写真をEメールで送って、お礼の返信でやっと知ったのでした。YouTubeで明日へ向かう人と検索すると、アニメが見られます。半崎美子さんの歌のアニメ版です。オオサンショウウオの大山しょう太君と蛍の幼虫の小川ほたるちゃんが嵐の中を二人で旅しているというストーリーです。わたしは、旅している二人は背の高い子をしょう太君、背の低い子をほたるちゃんみたいだと思っておりました。ディナークルーズが終わり、ツアー客をバスで送る過程で、二人はちょっと小さなホテルで下りました。バスの昇降口で盛んに手を振って、ホテルへ歩いてゆきました。

翌日は朝一〇時頃から、旅行会社のガイドさんが付いての観光でした。メコン川クルーズとメコン・レスト・ストップでの食事がメインです。歴史博物館も訪れ、ガイドさんの説明を聞きながらベトナムの歴史と文化の端緒を見せてもらった思いでした。しかし、仏教国ですから石の仏像がたくさん残っているのですが、そのどれもが首が折れています。それについてガイドさんはあまり明確な説明はありませんでした。しかし、推測は出来ます。日本でも同じでした。部族間の戦いに、勝ったほうが負けた側の祭っ

ていた神を破壊してきました。ベトナムの仏さまも同じことだったと思います。大きな石の仏さまの首が、胴体の横に置かれておりました。首のない物もありましたが、その顔はどこか西洋風で、その意味ではインドの仏さまのようでもありました。つまりアルカイックスマイルといった風でありました。しかし、銅でしょうか真鍮でしょうか、金属製の仏さまがとても精巧にできており、かつありがたい趣きで、ベトナムの人は日本人同様器用だと聞いておりましたが、昔からきようだったんだとわかりました。

しかし、ベトナムで一つ見ておきたいものがありました。それが漆でありました。江戸時代、日本はタイ、ベトナムから漆を輸入しておりました。日本産の漆は純粋な透明のもので着色もしやすく、伸びもよく、塗りやすいのですが、扱いにくく塗りにくいタイ、ベトナムの漆をあえて日本産の漆の三十倍の価格で買っておりました。それは、タイ、ベトナムの漆は塗った後三十日ほどでチョコレート色に変わっていき、さらに色が深まっていきます。その色を日本の職人は愛したのです。しかし、ベトナムの近代はフランスの植民地でありましたし、かつあの戦争です。漆のものは残っていないようなのです。日本は今も漆の大半を中国から、そして少しですがやはりベトナムから輸入しています。ベトナムの工芸品に漆塗りのものは売ってはいませんが、残念！

ホーチミン市からメコン川クルーズに向かうのに、高速道路を通りました。しかし、一般道とあまり変わりません。ガードレールがあるわけでもなく、分離帯が整備されてもいません。アップダウンもきつく、ヒョンドイのバスが日本の昔の乗り合いバスのような車体をきしませながら、ディーゼルエンジンをぶん回して走ります。下り坂でスピードが出すぎて怖いことがありますから、安全ベルトを締めておいてくださいと、ガイドさんがいいます。いや、それはこわい。出すぎるとどうなるんですか？そうは思ったのですが、なんとか無事高速は下りました。その高速の間、ガイドさんがベトナムの歴史を少し話してくれました。その話の中に、ベトナムは千年、中国の属国であったということがありました。しかし、白藤江の戦いで、ベトナムは独立を勝ち取ったのです。しかも、その戦いが実に巧妙でありました。まず、ハノイ湾にそそぐバクダン川の川底に長い杭を打ち込みます。そして、おとりを使って漢の軍船を上流に誘い込むのですが、バクダン川は海の満ち引きが大きく、干潮になると先に打ち込んだ杭が頭をだし、軍船の動きを止めてしまいます。それを両岸からと小舟で一斉に攻撃し、打ち滅ぼしてしまいました。ベトナムはこの戦いに勝利して中国から独立を勝ち取ったのです。いらい、ベトナムと中国は現代にいたるまで、十五回戦っていますが、一度も負けたことがありません。ベトナムは南シナ海で、中国と紛争のある海底油田も切削しており

ます。日本は中国と揉めることを恐れて、手をこまねいて何もしないで天然ガスを採掘されっぱなしにしているという不甲斐なさでありますのに。

ベトナムにあっても、瀟洒でかつベトナムの伝統さえ感じさせるレストランがメコン・レスト・ストップでありました。ここまでの途中の、バラックで屋根も板張り、看板はブリキに塗装しているだけの店が並んでいる一群をぬけて、景観の開けた中に、このレストランはあるのです。きけば、今の皇太子がベトナムを訪問された時、食事をとられたのが、このレストランだということです。期待がいっぺんに膨らみました。そしてその第一印象が、瀟洒で伝統も感じさせるということでした。その入り口の通路にベトナムのお土産物も置いてあるのですが、売りつけようと付きまとうということもありません。ただ言葉のこともあるのかとも思いました。英語で話しかけても日本語でも、反応がありませんでした。お土産を買うなら帰りにと、通り過ぎるしかありませんでした。

調理場もテーブル席の途中にあり、盛んに鍋を振る音が響いております。結局中華文化圏の中に長くいたので、料理も中華風が多いと感じました。大きな中華鍋で何かを揚げています。我々は団体旅行用の追い込み席に案内されました。しかし、料理はまだ先のこと、私たちはこのレストランの庭見物に回りました。池もあり、橋が渡されていましたが、その橋は渡ってはいけないとガイドさんに、先にくぎを刺されていました。折れるかもしれないというのです。作ってから整備がされていないのです。それはトイレも同じでした。清潔な外観ではありましたが、扉がずれて閉まらなくなっていたり、鍵も壊れたままです。池には足の長い大きな鳥が二羽来ていました。それが珍しく、待つ時間の無聊を紛らせてくれました。鳥も慣れておらしく、人が近寄っても飛び立つことはなくて、ちょこちょこっと歩いて橋の向こうへ行くだけでした。

その間、義兄嫁があの人と話していました。そして食事となって席に戻ると、二人を呼んで隣に座らせました。ここでは飲み物は別料金で、先払いです。ビールとかジュースを頼むと、先に集金されます。あの人もお金を払っていました。その係は大山しよう太ちゃんの方で、小川ほたるちゃんは義兄と嬉しそうに話していました。その横で義兄嫁がブツと膨れています。私はそれを笑って見ていました。妻が私をつつきます。おにいさん、ちゃっかり若い子の横に座って！ どうなんでしょうね。

ここで食べたもの。大きな魚の油で揚げたもの。エレファント・フィッシュというのだそうです。それが皿の上に立てらせてあります。それを何人かでつつくのですが、つい遠慮して、一箸だけ、箸を使う前に身を取って食べただけでした。一見、ピラニアを何倍も大きくしたような魚体でしたが、鯛のようなおいしい魚でした。生春巻きは代表的なベトナム料理ですが、店のお嬢さんがこのフィッシュの身と生野菜を取って巻いてくれます。忙しいのか、なかなか来てくれませんでした。巻いてくれたものを魚醬につけて食べました。さっぱりした、おいしいものでした。ところが、当のおさかなに誰も手をつけません。すると、たべてもいいですかと、ほたるちゃんが箸をのばしてきました。誰もがどうぞどうぞと言うと、上手に身をほぐし、実においしそうに食べます。上手ね、と義兄嫁がほめています。本当に上手で、一人で食べてしまい、皿には頭と骨が立つのみになりました。私は自分で巻いた春巻き一つと野菜サラダ、それと珍しい果物をすこしだけでした。それと風船のように膨れたお餅が少し。これは甘みがあって美味でした。

この後、メコン川クルーズが待っています。川幅三キロの川なんて、見たことがありません。その川の中州の水路を、手漕ぎの川船でめぐります。船には船頭さんが船首と船尾にのり、あと乗り込めるのは四人だけ。ですから、一艘に私たちだけで乗りました。

これに乗るまでには、中州を歩き、はちみつと果物の店に寄り、そこでも女の子たちと座ったのですが、その店のパフォーマンスが大変でした。巨大なニシキヘビを首に巻いて記念写真を撮るといふものです。これに果敢に挑戦するのは女性で、男はいませんでした。私など、蛇を見た途端後ずさりし、一番後ろに立ってみているばかりです。

ベトナムの驚くべきことは、このメコン川流域の水郷辺りでは三毛作だということです。ベトナムの川の水が土色に濁っていることにも驚きました。日本で土色に濁った川など、洪水の時以外、見たことがありません。しかし、この土色に濁った水が、水田に栄養を与え、肥料らしい肥料を与えなくとも三毛作を可能にしています。しかし、それにしても、この川幅の広さはどうだ！そして、その川幅いっぱい、満々と濁った水が流れていることが驚きでした。しかし、それでも水が足りなくなることがあるそうです。そんな時には、ひたすら柄杓で干上がった用水路の水をすくい入れます。世界の米の生産量こそベトナムは世界第五位ですが、輸出量は第二位です。しかし、ここまでになるためにはメコン川中州の開発を国策として相当行ったのだそうです。それでも、農民はひたすらこんな苦勞をしています。この忍耐強さも、同じく米を作ってきた日本人と共通したところがあると思います。

私は、このメコン川クルーズに来るまでの間にガイドさんが話してくれたことや、ホーチミン市内の混沌とした様子、町を歩く人たちの顔を見ていると、戦後私たちが育った時代のことを思い出しました。そして、あと五年は大丈夫だろう、しかし十年、いや十五年経つと、日本はベトナムの下で働いているかもしれないと思ったのです。いま、家電はそのほとんどを中国に買い取られました。三洋電機しかり、NECのパソコン部門はレノボに、三菱も東芝も、ブランドは残っていても中国に買い取られました。ですから、ベトナム人も、日本の会社名が付いていても、Made In China とあれば買わないのだそうです。ホンダもそうです。原付とかバイクがベトナム全土に普及した時、その車種はスーパーカブでした。直して乗れば十五年でも乗れる、直さなくても十年は乗れる、そんなバイクがスーパーカブであったのです。ですから、ベトナムではバイクのことはホンダと言うのだそうで、これは辞書にもそう載っているそうです。ヤマハのホンダに乗っている、という会話が普通にされているのがベトナムです。ヤマハのホンダははかっこいいから、若い人には人気があるとガイドさんが笑っていました。

さて、メコン川クルーズでした。しかし、この中州での蜂蜜ティーの店でのアトラクションの歌手たちも、クルーズの船頭さんたちも、町に働きに行けない最下層の人た

ちで、一日三百円で暮らしています。ですから、皆さん方のチップが最大の収入になっていますので、どうか、少しでもチップをやってくださいと言われてしまいました。蜂蜜ティーの店では、演奏が終わると、女の子の中で、一番若くきれいな子が小さな竹籠をもって各テーブルを回ってきました。私はもうドンは持っていなかったのので、一枚あったきりの五百円硬貨をそこに入れました。そして、マングローブの茂る川筋をめぐる帰ったときは。妻の持ってた、これも一枚っきりの二万ドンを渡しました。なんか悲しいじゃありませんか。私たちが豊かとは思いません。しかし、これはまるで強者のおごりだと、後ろめたく、居心地の悪い思いでした。私の買ったベトナム土産は、ここで買ったココナツミルクの手作りキャラメルと石鹼でした。少し睨んでいるような目つきの若い男の人が、収穫してきた硬いココナツを手を持って地面に突きたてた棒の先の刃物に刺し、皮をむいて見せてくれました。それはあまりに手際よく、思わず拍手してしまいました。つられて周りの人の拍手です。すると若い男の人は、はにかんで顔をゆがめ、行ってしまいました。ここで買ったココナツ石鹼が、人に配る妻のお土産になりました。

さて、長々と書いてきたベトナム旅行記も、もうすぐおわります。あとは、息子に案内されて、最後の夕食をホーチミンで取ってホテルに帰り、空港へ連れて行ってくれる旅行会社のバスを待ち、帰国するだけです。ところが、息子の案内してくれたスパも、最後に行ったレストランも、実は日本人の経営であったと、息子に聞かされました。ぼらない、丁寧、安心、店の人も教育されている、つまり定評のある店として信用されている店は、日本人経営だからということでもあるのだそうです。

初めて海外に行って、それがベトナムで、そこでいろいろ物珍しいものを見たからといって、まるで世界の全部を見たようなことを言いましたが、日本がもし同盟を求め、友好を結ぶのなら、ベトナム以外にはないと思います。どの国に対する同盟かといえれば当然中国です。北朝鮮もあるでしょうが、これは一時のことで終わると思っています。しかし、真に警戒し、備えなければならないのは中国です。経済についてとか、敵対的行動、覇権主義といったことではない、中国共産党の戦略が日本を飲み込もうとしていることへ備えなければなりません。しかし、国家も国力も、そこに住む国民の国民性で決まるとしています。結局むさぼる国家というのが、中国です。タイ、カンボジアなどの周辺に落ちこぼれた中国人が移住してきます。そこでやっていることは、その国の富を結局むさぼることで、彼らはそこで蓄えた富を持って、もう一度中国で勝負するのだといいます。いい方をかえれば、中国人は現世利益しか信じてはいません。お金だけしか信じていないと言い換えられると思っています。

ベトナムは仏教国家です。社会主義国ではありますが、これも一時期の政治体制ではないと思います。この国の二千年以上の民族性は、人間の考えたイデオロギーで縛られたぐらいではなくなりません。ベトナムは仏教のほかに、どうしても中国の影響として、儒教的な価値観も残っています。ところが、これはまさに日本と同じ国民性だと思います。宗教に縛られない、しかし儒教的道徳観をのこしている、これがベトナムであり、日本だと思います。国家の規模、国土面積、人口、そして国民性、世界でこれらから発展を遂げる都市の第二位がホーチミンと言われています。韓国なぞ、もう滅んだ国家です。地政学的な価値しかない国です。彼らもそれは知り抜いているでしょう。

レジスタンスホテルは朝にチェックアウトしておりました。メコン川クルーズから帰ると、まだ二時間ありました。私たちはホテルに迎えがくるまで、もうどこへも行きたくありませんでした。ですからバッグを受け取るとへたり込むようにロビーの一脚しかないベンチに座り、時間を過ごしました。ホテルのどこかでお茶でも飲んでという知恵も回りません。じっと待っていたのですが、ふっと目についたのが、ロビーに掲げられた二枚の絵でした。黒地の中にアオザイでしょうか、黒と朱の洋装をした女性二人が重なって描かれていました。絵、二枚とも同じテーマで描かれています。私はしごくこの絵にひかれました。レジスタンスホテルに行かれた時は、ぜひ見てください。美しいです。

息子が帰り、もうすぐ迎えが来るという時になって、しみじみ外を見ると、来た時と

同じ、バイクがホテルの前といわず横と言わず、流れ続けて下りました。そこにやっと迎いのバスが来てほっとしたのですか、これから出国手続きをしなければなりません。結論から言うと、これも義兄のペースで、スムーズに行きました。パスポートもEチケットシートも全部手に持ち、見たければ見て、と突き出せば終わりです。機内に持ち込みの肩掛けバッグも同じこと。そんな義兄に助けられながら、出国審査を通ったのですが、そこへ行くバスの中でもガイドさんから、来年の春には家族を連れて日本へ行きたいという話を聞きました。桜がきれいだからといっておりました。ところが、彼らベトナムの人が外国へ行くには補償金のようなものとして、四十万円相当のお金を国に預けなければならないのだそうです。この金額はベトナムの人の一年間の収入相当です。それを用意するのが大変で、行けるかどうか分からないとおりました。

ホテルからホーチミン空港へ向かう道はもうすっかり闇に包まれておりました。サイゴン川と並行に走り、いつの間にか郊外に出て、ビルやコンクリートの建物もまばらになり、暗闇にたくさんの大きな看板が照らし出されはじめました。見間違いかもしれませんが、ネオンサインを見たような気がします。ブティックでしょうか、狭いショーウィンドウの明るさの上のにじんだ青と紅色のネオンが暗やみの黒の中で光をにじませていました。もう遠くなった日本の風景にそれがあったと思います。大学時代、夜のバイトから帰る道にそんな風景がありました。ネオンなんて、もう忘れてしまっていました。

空港に着くと、ガイドさんはバスとともに帰りました。あとは自力で帰れということです。三日前に着いた空港の中のことなんか、忘れています。しかし、義兄たちはなぜか確信をもって、バスの同行者についていきます。私たちはひたすら後を付いて行くのみ。入口も奥も人が混雑していて、ぶつかりそうになりながらも必死に後を追うと、突然人影がまばらなフロアーに出ました。義兄たちが周りをきょろきょろしていましたが、あそこでチェックインするんだわといえます。大きなカウンターがあり、その向こう側に人が固まっています。それでも私はどうすればいいのか解らず、何か偉そうにしている軍服姿の女性に、どこでチェックインすればいいのですか、Where should I check in? と尋ねてみました。すると急に怒った顔でぷいっと向こうに行ってしまいました。なんか言えばいいのに、と思ったのですが、彼の女性の部下と思われる若い女の人で、やはり軍服を着た人が小走りにやってきて、言葉は発せず、向こうを指さします。たくさんの方が固まっている方でした。礼を言い、そちらに向かうと、義兄たちはもう列に並んでいました。またしても私の取り越し苦労と、義兄の押しの強さが発揮された場面でありました。

列には白人の人も少しいましたが、大半はアジア系でありました。そうでありながら、日本人は

解るのです。遠目にもあの人は日本人と判別でき、たいていの場合、外れません。そんな観察をしていると、すぐにチェックインの順番が来ました。何度も言いますが、私の取り越し苦労は無駄なことでした、パスポートとEチケットシートを見せれば終わりでした。荷物はすぐにカウンターの中に引っ張り込まれ、一気に身軽になります。もう中に入っているのか、免税店も中にあるし、と義兄が言いますので、出国検査と税関へ向かいます。しかし、どこが税関か解らないまま通過し、ボディチェックに入りました。すると、前の男の人が、ケースにポケットのもの全部と靴も脱いで入れておられます。そうするものかと、私も肩掛けバッグ、靴を脱いでケースに入れました。すると、そのケースがゲートを通り、私も人間用のゲートを通らされます。そして荷物を返してもらっていると、またも若い軍服姿の男性が私をにらみます。そうです、帽子です。おお、

そうかと大急ぎで帽子を脱ぐと、彼はそっぽを向いて行ってしまいました。なんかいえないのに、と思うのは日本人だからでしょうか。しかし、これが終わるまでは全く余裕はありませんでした。

時間が十分以上にありましたので、まあとりあえずは免税店でも覗いてと義兄が言っておりましたので、出国手続きを済ませた気楽さから地下街のような免税店を見て回ったのですが、なんとなく圧迫感を感じ、その先へ抜けて待っていました。すると、そこであの女の子二人に出会ったのでした。同じツアーでしたから、私たちが乗ってきたバスと一緒に乗っていたはずなのに会っていませんでした。あら、おんなじ飛行機で帰るの？と義兄の兄嫁が声を掛けました。義兄嫁が、私たちは関空への直行便だと言っております。しかし、二人は、はにかんだように、行きと同じ仁川経由だと言って、そっちのほうが安いと付け加えました。私は何気なく、君たちって、年恰好から行くと私たちの孫の世代に近いねと話しかけました。だいぶ以前手元から離れていった孫たちよりは少し年上ぐらいと見受けたからです。君たちって、看護婦さん？ そういって、エー！なんでわかったんですか？と驚いています。そうと見抜いたのは、やはり義兄嫁でありました。看護婦さんは皆自立していて、ものもはっきり言うし、甘えたところがないというのです。このベトナムで解放された気楽さがあって羽目をはずしていたのですが、彼女たちは確かに看護婦さんでありました。年寄りをなめちゃいけない、わかりますよと、少し恰好をつけて言いました。そして、こんな年寄りと遊んでくれて有難うと礼を言いました。孫がジイジとあそんでくれたようで嬉しかったのです、と。すると、こっちこそ、一緒に連れて行ってきて心強かったですといい、突然、大山しょう太君の方がハグしてくれました。驚きました。戸惑ったと言ったのほうがいいのでしょうか。意識はどうすればいいのか解らなくて呆然としておりました。そして心は悲しんでおりました。なぜ悲しんでいたのか、帰国後しばらく考えておりました。解りません。こんな爺をハグするなんて、なんてこった。すると突然、一週間して解った

のです。ああ、と思いました。私はいたわられていたのです。そうと気付いてのち、一か月先に、義理の叔父の葬式がありました。そこで年の離れた従弟に会いました。私は夫をなくした叔母に、元気出してな、と力づけたのですが、逆に、この年の離れた従弟から別れ際に、元気でおってな、と私も言われました。ああ同じことだと思いました。私はもう、いたわられる存在になってしまったのです。そんなことはないぞ！私はまだ人を守ることが出来るんだぞ！そう思いながら、今はうつむいてしまいそうになります。のちに、妻が訊いておいてくれたメールアドレスに、ベトナムでの彼女らを写した画像を送りました。かわいい子らです。有難うございました。じじいと遊んでくれて感謝してます。これからのこの子たちの人生が幸せでありますように。そう祈っています。これからなんですから。

昨日、息子がベトナムから帰ってきました。私たちが帰った関空への便とは違って、福岡空港へ降りる便でした。一時間近く飛行機に乗る時間が短いそうです。しかし、何時間もジェット機に乗って帰るのは大変なことだと実感しました。日本での入国審査も、日本へ帰ってのことですから不安などありませんでした。ところが、私は大変な失敗をしておりました。そのエピソードをお話して、このベトナム紀行をおわりにします。それは例のキャリーバッグの件です。

帰国後、関空でこのキャリーバッグを受け取り、さあWiFiを返そうという段になって、鍵を失くしたことに気付きました。ルーターはキャリーバッグの中、鍵はない、混乱しきってWiFiを借りたコーナーへ駆け込みました。返さなきゃいけないんだけど、鍵を失くして開かないんよ。まあよく税関でバッグを開けろと言われなかったことです。しかし、目の前のところで一杯いっぱいでした。すると、受付嬢が、今日返却があったことにしておきます、あとは鍵が開いたらお返し頂ければけっこうです、もし、開かずに手間取るようなら、保険がかかっておりますから、その旨、ご連絡いただければ返却いただかなくてもけっこうです、と言ってくれました。いや、開ける、鍵を壊しても開けてかえします、そう言い、私は返却先の住所をっ書いたものを貰い、そそくさと帰宅のための高速バスへ走りました。そしてそのバスに乗っている間中考え続けました。一つは鍵屋さんに開けてもらう。だめならペンチで捻って壊す。しかしもう一つ、考え付いたことがありました。

考え付いたこと。まさに苦肉の策、苦し紛れでありました。私たちが乗った高松への高速バスが神戸を走っている間も、淡路島の単調な景色を走っていても、私は虚仮の一念でありました。私はやっぱり取り越し苦労が過ぎるのです。淡路大橋も鳴門大橋もさっさと通り過ぎて、それでも遅いと思っていました。帰りの飛行機の寒さも、それで寝られなかったことも、時差ボケも忘れていました。そしてついに高松のゆめタウン前に着いて、私は裏の駐車場へ行こうとする妻を促して、ゆめタウンの方へバッグをガラガラ押して向かいました。私のバッグも妻のバッグも、このゆめタウンのバッグ売り場で買いました。ですから、そのバッグ売り場へ行けば合鍵がなんとかなるのではないかと思いついたのです。たとえば、バッグの製造番号で使われている鍵が解り、合鍵が手に入るとか、鍵屋さんを紹介してくれて開けてくれるとか言ったことを期待したのでした。ですから、ものも言わず、なぜゆめタウンに行くのかも妻に説明せず、ひたすら、店の中も外もガラガラと音をさせて、人に見られながら、それでも人目も気にせず、売り場に向かいました。そして、すみませんと店員に声をかけ、すがる気持ちを押し隠し、事情を説明しました。すると、ちょっとお待ちくださいといい、店員さんはカウンターの方へ向かい、鍵束を持ってきました。そして私のバッグの鍵穴に鍵を差し込み、まわしてみます。一本目は回りません

。二本目も。でも三本目はするりとまわりました。ちょっと差し込み、まわしてみる、そんな作業で、私の思い悩んだことがあっさり解決してしまったわけです。まさに、なんということでしょう、でした。たまたま高速バスに乗った乗り場がゆめタウン前であったことも幸運であったとおもうのは、思い込みが激しすぎるのでしょうか。しかし、その結果、もう一度出直すこともなく、アクシデントは難なく解決したのです。こうしてベトナムへ初めて行くという私の旅も、大団円で終わりました。

それにしても、私は思い返しています。いたわられるということに反発しながら、いたわられると居心地がいいのです。まるで、いつまでもそこに座っていたくなる気分させられます。これは危険です。甘えになります。甘えちゃいけないのです。ベトナムから帰って、わたしはもう一つ考えることがありました。それはこの一週間後の高野山行きでも思ったのですが、国内でも英語はしゃべれないと不自由します。四国は八十八か所巡りで外人さんが多数回っています。その人たちの道案内も出来ません。私は英語をこの機会に勉強しなそうと思いました。年だからはありません。今からも自分の足で歩いてやっていこうと思っています。そのうち、善通寺さんの英語のボランティアガイドになればいいなと思っています。

追記

妻の大きなバッグは遂に満杯になることなく、日本に帰ってきました。行きも帰りも、スカスカのかすかすで、図体だけがでかい、空っぽのまま帰ってきたのです。

異国へ そして私は異邦人になった

<http://p.booklog.jp/book/125427>

著者 : pinokopapa

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/pinokopapa/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/125427>

電子書籍プラットフォーム : パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社トゥ・ディファクト